

# 燈 光



# 「VDES開発のためのワークショップ」の開催について

交通部整備課安全システム開発室

海上保安庁交通部は、平成28年2月15日から19日までの間、IALAと初の共催により「VDES開発のためのワークショップ」を日本で初めて開催しました。

船舶自動識別装置（AIS）は、海上における人命の安全のため国際条約（SOLAS条約）に基づき、国際航海に従事する旅客船、総トン数300トン以上の船舶及び国際航海に従事しない総トン数500トン以上の船舶に搭載が義務付けられています。

現在、このAISは船舶の安全運航に大きく寄与しているほか、航路標識AIS、AISクラスB、搜索救助用位置指示送信装置（AIS-ART）等、その用途の多様化が図られ、物流の効率化、船舶の搜索救助活動等の分野でもその有用性が世界的に認識されるようになりました。しかし、今後更にAISの利用が拡大すると、大量にやりとりされる情報によってAISの通信が圧迫され、円滑な通信ができなくなるこ

とが考えられます。このため、情報を高速かつ効率的に通信することができる次世代AISであるVDES（VHF Data Exchange System）の開発に向け、22の国と機関から63名のAIS専門家が出席し、その性能基準等の議論を行いました。スケジュールは次表のとおりです。

月 日	内 容
2月15日(月)	ワークショップ開会 講演会・パネルディスカ ッション
2月16日(火)	全体会合 WG1： MSC97への入力文書 WG2： VDESの運用に関す るガイドライン WG3： VDESの技術に関す る付属文書
2月17日(水)	WG1 WG2 WG3
2月18日(木)	テクニカルツアー（国立 研究開発法人 海上技術 安全研究所）
2月19日(金)	全体会合（各WGまとめ） ワークショップ閉会

ワークショップスケジュール

## ① 講演会とパネルディスカッション

1日目には、一般の方を対象とした講演会とパネルディスカッションを開催しました。開催にあたり、広く一般の方々にVDESの開発に関する国際的な動向を知っていただくため事前に聴講希望者の募集を行ったところ、当日は会場がほぼ満席となる80名の方々の参加がありました。

講演会及びパネルディスカッションに先立ち、IALA副事務局長から開催挨拶として「VDES開発の経緯と現状」について説明があり、続いて海上保安庁交通部長から「AISの現状及び課題、この課題を解決するために海上保安庁が取組んできたこと」について挨拶がありました。

その後、東京海洋大学名誉教授の今津博士から「航行安全のためのVDESへの期待」について基調講演があり、続いて国内外から参加した7名の専門家によるVDESに関する動向等についての講演がありました。



ワークショップ参加者集合写真



オープンフォーラムの状況

た。演題は以下のとおりです。

- ・過去3年間の「次世代AIS国際標準化のためのワークショップ」の結果（海上保安庁）
- ・国際電気通信連合が開催したWRC-15の結果（ドイツ・連邦水路海運庁）
- ・VDESに係る技術（カナダ・ExactEarth社）
- ・VDESの運用要件（オーストラリア・海洋安全庁）
- ・VDES開発状況及び今後の予定（日本無線株式会社）

・ASM試作機の開発及び実証実験（韓国・電子通信研究院）

・IECの国際基準制定プロセス（フィンランド・FurunoFinland社）

講演の後、パネルディスカッションを行いました。

聴講者からは、衛星通信と陸上通信の干渉問題、衝突防止に関する規則類への反映、セキュリティ関係の問題、港内の効率向上、VDESの応用及び期待、VDESの完成見込み等、その他多数の質問がありました。最後にVDESの開発に関わりたい企業について会場で尋ねたところ、11名の手が上がり、VDESの関心が非常に高いことを感じさせるパネルディスカッションでした。

## ② 会議

2日目には、午前中の全体会合においてVDESの概要説明と総論的な論点の抽出が行われ、その後、3つのワーキンググループに分かれ



ワーキンググループ議論状況①



ワーキンググループ議論状況②

て、議論が進められました。

会議最終日には、各ワーキンググループの成果を再確認し、「VDESの性能基準」「VDESユーザーの要求」「運用コンセプトの技術文書」と3つの結論が出されました。

なお、VDESの性能基準案については、今後、IALAにおける意志決定を経て、今年秋に開催予定のIMOのMSC97へ報告する予定です。

### ③ テクニカルツアー

4日目には、国立研究開発法人海上技術安全研究所を訪問しました。

同研究所は、海上交通の安全及び効率の向上のための技術や、海洋資源及び海洋空間の有効利用のための技術、海洋環境保全のための技術に関する研究等を行っている重要な施設です。はじめに、海上技術安全研究所の業務紹介の映像を視聴した後、4班に分かれ、海上技術安全研究所内の施設を回り、各施設の業務内容等の説明を受けました。見学した施設は次のとおりです。

- 船の航行性能や各種実験が可能な中水槽
- 構造材料寿命評価実験棟
- 操船リスキミュレーター
- デイジーゼルエンジン関連実験施設

最後に、波や風を再現出来る実海域再現水槽の紹介映像を視聴しました。日本の船舶安全航行に関する研究について深く触れられ、大好評を博しました。



海上技術安全研究所見学状況



深大寺観光の状況

また、今回のテクニカルツアー後には代表的な日本料理である蕎麦を食し、また帰路では東京都調布市にある深大寺に立ち寄り、日本の文化にもふれてもらいました。

### ④ 最後に

海上保安庁では、これまで3年にわたって「次世代AIS国際標準化のためのワークショップ」を開催し、そして今年には国際航路標識協会と共催で「VDESの

開発のためのワークショップ」を開催することができました。当初、ワークショップに参加する人数は、40名程度かなと予想していましたが、実際には、予想を大きく上回る63名が参加しました。このことから、国内外におけるVDESへの期待が相当高いことが伺えます。

海上保安庁交通部では、国内外関係機関と協力し、引き続きVDESの国際標準化に向け取り組んでまいります。

最後になりますが、ワークショップ開催に当たり多大なご支援・ご協力を頂いた関係機関各位、多忙の中ワークショップへ出席頂いた国内外専門家の皆様、そして、昨年度までの三年間にわたってご協力頂いた笹川平和財団に改めて感謝申し上げます、筆を擱くこととします。



— 明治の灯台の話 (51) —

## いぬぼうさき 犬吠埼灯台 (その3 / 3)

灯台 研究生



### 国宝的犬吠埼灯台レンズ

国の登録有形文化財に登録された犬吠埼灯台旧霧笛舎、その中に入ると傍らに犬吠埼灯台の初代のレンズが展示されています。隣の灯台資料展示館にある回転する同じ一等レンズに比べ、ひっそりと余生を過ごしているように見えますが、今も光輝く姿や無数の傷跡は、犬吠埼灯台の栄光と受難の歴史を、私たちへ語りかけてくれます。

燈光昭和9年3月号の明治天皇燈台寮御臨幸60周年記念号には、この犬吠埼灯台のレンズは、明治、大正、昭和のすべての天皇の天覧の賜った国宝的レンズであると称賛した記事が見られます。当時犬吠埼灯台勤務の鈴木美代治氏が記したものです。前回、大正天皇、昭和天皇が皇太子時代に犬吠埼灯台を行啓（見学）された事実は紹介しましたが、明治天皇皇后両陛下が横



犬吠埼灯台旧霧笛舎内に展示の初代犬吠埼灯台レンズ

浜の燈台寮を行幸啓された明治7年3月に、ご覧になられた試験灯台のレンズが、その後犬吠埼灯台に設置されたとしています。しかし、明治、大正期の公的な記録資料には、この事実はどこにも記されていません。燈光の同号（60頁）には、この話は鈴木氏が唱えた説であると明記されています。点灯開始から60年後に、

一灯台職員が燈光誌上で発表した説が、今は定説になつていますが、果たして本当のところはどうだったのか、当時の新聞報道等を見ながら、今一度真偽を確認してみます。

まずは、拙稿「明治の灯台の話」(17) 試験灯台」でも引用した明治7年3月19日付の横浜毎日新聞の記事と燈光昭和9年3月記念号には、明治天皇皇后兩陛下の横浜燈台寮臨幸の様子が次のとおり見られます。

(明治7年3月19日付横浜毎日新聞)

昨水曜日(明治七年三月十八日)午後三時五十五分皇帝陛下皇后宮 本港へ御着車在しまし 汽車駅測量課樓上に於いて 御小憩あり 尋ねて燈台寮へ臨御伊藤工部卿(伊藤博文) 佐藤燈台頭(佐藤與三) 迎待し奉る 参議寺島(寺島宗則) 大隈(大隈重信) 両公を始め 御随從燈台天覽濟み 大藏省出張所を行在所として渡御あり 御用度は高島嘉右衛門勤之

中略

今十九日午前九時三十分 行在所より御騎馬にて花咲町瓦斯会社機器運轉觀覽あり 皇后宮も御馬車にて御同行 十時二十分ステーションへ渡御 十一時御発車相成る

照<sup>しょう</sup>赫<sup>こく</sup>し 地球旋回昼夜をなすの景況を擬す 衆人雲集立錫の隙なし 且つ当夜燈台頭より 明十九日 諸人縦覧を許すの布達あり

(燈光昭和9年3月記念号)

明治七年三月十八日午後二時二十分

聖上 皇后宮御出門

三時 新橋ステーションヨリ汽車乗御

四時 横浜ステーション着御

聖上ハ御乗馬 皇后宮ハ御馬車ニテ、燈台頭佐藤與

三先驅燈台寮へ臨御、同寮奏任官以上併ニ御備外国人

一同寮内ニテ奉迎、寮内ニ於テ暫時御休憩

各国公使(外務卿誘引)及本寮奏任官併ニ御備外国人

人拜謁終テ、燈台頭外国人首員御先導

諸器械装置ノ場所天覽アラセラル 皇后宮御同覽

第一 鋸器械ヲ運轉シ、諸材ノ切断ヲナス

第二 圧力器械ヲ使用シ、練瓦石ヲ試験ス

第三 指物器械ヲ運轉シ、種々ノ仕事ヲナス

第四 倉庫内点燈使用品整列ノ場所天覽ス

第五 試験燈台中ニ装置セル各種ノ燈籠器械ニ点火ス

第六 同第二層室内点燈資用物品整列場所天覽ス



初代試験灯台と横浜燈台寮  
(古絵葉書から拡大)

第七 同第三層室内ニ装置セル燈明器械ノ運転ヲ初メ  
且点火ス

右天覧終テ、午后六時十分、行在所(大蔵省出張所)  
へ還御アラセラル

御先驅併ニ奉送共臨幸ノ時ノ如シ 以上

明治天皇は、試験灯台の上まで登られたと記されて  
います。間違いないこの時、光り輝く灯台のレンズも  
ご覧になられたものと思われまます。

次に、今回新たに確認した明治7年3月22日付の東  
京日々新聞には、次の関連記事が見られます。

当一月三十一日 聖上横浜へ行幸の所 御延日相成  
即ち本月十八日午後三時の汽車にて臨幸あり 皇后宮  
も御同車にて横濱ステーションへ例のごとく四時着御  
夫より馬車にて所々御遊覧せられ其夕燈明臺の燈火  
観あり 此燈火は青赤白の色を分ち 其夕は最も美麗  
壯観なりしと 又夫より瓦斯燈の原屋並高島屋にて  
は 火を以て菊桐の御紋を欄干一面に列ねうつくしき  
事云計なし 其夜は同港租稅寮出張所へ滞輦ありて  
翌十九日還幸在せられたるよし

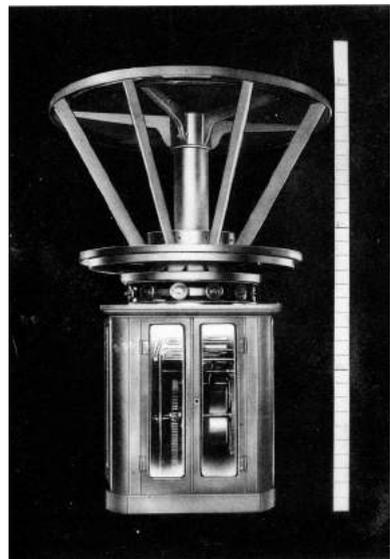
本紙では、燈台寮への訪問の事実は省略され、大衆  
が押し寄せた試験灯台が大きく取り上げられていま  
す。点灯開始当夜は、赤、青、白色の美しく壯観な灯  
火であったという、どこにも記録が残されていない点  
灯開始当初の新事実が確認できました。また、翌日の  
3月23日付の同紙には、更に問題の試験灯台のレンズ  
の詳細までが次のとおり紹介されています。

横浜燈臺寮構内に設立せられし燈明臺は 雛形の

様なる者にや 諸國の崎々と浦々に設置せられしよりは 其丈低し 臺<sup>だい</sup> 四角にして 凡<sup>おほま</sup> 高さ四丈餘 其上に 燈籠<sup>とうろう</sup> (レンズ) あり 高さ壹丈位にて八角なり 差渡し六尺位 上下細く中ふくらなり 八方共真中に丸き形ありて 夫<sup>それ</sup>より段々に三角なる刻ある厚ガラスにて張り 其刻より一々光線を返射して光の力を強くなるの工夫なるべし 而して此燈籠は絶へず自から廻り 火を点ずれば 互ひに紅青白等の色を現出して甚だ美觀なり 蓋<sup>けだ</sup>し是は 航海の者をして見認め易からしむ爲なるべし 又燈籠の外はガラスにて圍ひ 其上をトタン板にて家根を葺<sup>ふ</sup>き 方角差を立<sup>たて</sup> 其脇に小さき銅製の風車を立たり 少し風あれば絶へず廻れり

ここに記された試験灯台のレンズは、高さ約3メートル、形状は八角形、上部と下部は細く中央は膨らみ、その中央は8面とも丸い形で、三角の厚ガラスが段々にあるという正に8面体の一等フレネルレンズであったことが分かります。このレンズから横浜の港へ放たれたフランスの3色旗を思わせる赤・青・白の光は、明治天皇を正しく魅了した筈です。

もう一紙、明治7年3月23日付の郵便報知新聞には、次の記事が見られます。



「觀覽を辱ふしたる旧試験燈台回轉器械」  
(燈光昭和9年3月号掲載写真)

去る十八日 横濱燈臺寮に於て 第一等回轉器械据着<sup>つけ</sup> 点燈に付 聖上皇后宮共 行幸 同夜 天覽あり 翌十九日夜は 同所御構内諸機械等までも諸人の縦覽を許され 且十八日は高島屋嘉右衛門住居 (中略) 頗る人目を驚かせり 群集の看者山の如く 最も未曾有の美觀なりしといふ

ここでは、試験灯台の器械は第一等回轉器械と記されています。以上の記録から、明治7年3月18日、明治天皇皇后兩陛下が御覽になられた横濱燈台寮の試験灯台に設置されていたレンズは、犬吠埼灯台の初代レンズと同じ型式の8面体の一等フレネルレンズであつ

たことは間違いないと思われます。

ただし、この年、8面体の一等フレネルレンズは御前埼灯台にも設置されています。この2か月後の明治7年5月1日に点灯開始しています。この時期からすれば、試験灯台のレンズが御前埼灯台に取り付けられた可能性も十分に考えられます。しかし、次の太政類典の記録から、御前埼灯台には設置されていないと愚生は判断します。それは、御前埼灯台点灯開始1ヶ月前に出された次の告示です。

(明治) 七年四月二日

御前埼燈臺落成ス

工部省届

近江國榛原郡御前埼燈臺落成ニ付 別紙ノ通 府縣  
へ及布達候 此段御届申候也

追テ外国公使等へハ 例ノ通 外務省ヨリ及布達  
候也

同省布達

近江國御前崎ニ於テ 別紙第三号第一等旋轉燈明ヲ  
設ケ来五月一日ノ夜ヨリ点燈致候條 此旨布達  
候事

御前埼灯台が完成し点灯開始する予告の告示が、3月18日からわずか2週間後の明治7年4月2日に出されているのです。

この時期の各灯台は、一定期間の試験点灯を経て、点灯開始日より早い時期に既に点灯できる状態であったことが、当時の英字新聞の灯台視察船同乗記に見られます。即ち臨幸の翌日の灯台見学会を終えた3月20日から4月2日までの間に、レンズを試験灯台から取り外し、横浜から御前埼灯台へ輸送しそこでまた組み立て、そして試験点灯の期間を経て、燈台寮へ点灯開始予定日を報告し、更に燈台寮からの報告を受け工部省が告示するまでを、このわずか2週間で行ったとは、愚生にはどうしても思えません。

一方、犬吠埼灯台の完成と点灯開始予定が告示された日は、明治7年10月27日で、3月18日からは7ヶ月間の十分な期間があります。

8面体の一等フレネルレンズは、御前埼灯台の設置を皮切りに、次が犬吠埼灯台、その次は2年後の明治9年3月1日点灯開始（完成は明治8年12月30日）の角島灯台となつています。

以上の記録から、明治7年3月18日、明治天皇皇后両陛下下の天覧を受けた横浜燈台寮の試験灯台のレンズ



昭和6年9月22日  
秩父宮雍仁親王  
ちちのみややすしんのう

〃  
朝香宮鳩彦王  
あさかのみややすひこおう

昭和10年9月26日  
北白川宮永久王  
きたしろがわのみやふくむおう

昭和11年7月26日  
三笠宮  
みかさのみやしげ

昭和14年5月9日  
照宮成子内親王  
てるのみやしげこなひんのう

〃  
賀陽宮美智子女王  
かやのみやみちこのみやう

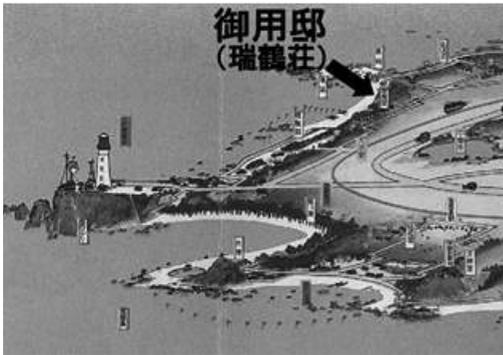
〃  
久邇宮正子女王  
くにおのみやまさこじようおう

〃  
久邇宮朝子女王  
くにおのみやあさこじようおう

明治初年から太平洋戦争までの間、記録に残る犬吠埼灯台を訪れた皇室関係者は25名にも及びます。多くの皇室関係者が訪れた理由のひとつには、灯台近くにあった伏見宮貞愛親王の別邸「瑞鶴荘」の存在が大きく考えられます。当時の銚子の観光絵図に御用邸とも記された瑞鶴荘は、明治38年に建設されました。伏見宮は、明治36年の夏に犬吠埼灯台を訪れ、翌年には瑞鶴荘の建設に着手し、その後亡くなる大正12年までの19年間、毎年夏と冬に訪れています。前回紹介した大正天皇は臨幸の前に、この瑞鶴荘にて昼食をとった後、灯台を訪れており、昭和天皇は灯台臨幸後に瑞鶴荘に泊し、同所から犬吠埼灯台の光芒を展望されたと大正5年11月27日付け燈台公報に記されています。

もうひとつ、訪れている方々に大きな共通点が見られます。複数で来ている場合、年齢が皆十代の学生でした。昭和天皇も5名の学友と共に訪れています。東京から電車に揺られ、銚子駅からも車ですぐの場所です。ご学友と共に遠足のように犬吠埼灯台を訪れ、雄大な太平洋の眺めを灯台から楽しんでいたようです。

そして最大の特徴は、2回以上訪れている方が複数おられることです。瑞鶴荘を建てた伏見宮貞愛親王はもちろん、朝香宮鳩彦王（旧姓久邇宮鳩彦王）、三笠宮



大正5年11月27日付け燈台公報に記されています。

そして昭和天皇と、正ただに犬吠埼灯台は皇室に愛された灯台と言つても過言ではありません。昭和天皇は、皇太子時代の大正5年11月17日と、30年後の昭和21年6月7日の2回訪れています。2回目の訪問の様子は、燈光の記念すべき戦後復刊第1号となる、昭和21年7・8月合併号に次のように見られます

天皇陛下に於かせられては、今回畏くも縣下の食糧増産状況及び千葉、銚子両市の戦災復興状況、戦災者並に海外引揚民達の生活実情、銚子港の現況、麦作並に甘藷苗床など、さまざまな民○を御視察の爲め、六月六、七日両日にわたり縣下に行幸あらせられ、本台には第二日目の七日朝御臨台遊ばされた。

懸念された数日來の險悪な天候も、行幸日には綺麗に晴れあがつて、前日は新緑滴る銚子新生駅構内の宮廷列車中に御假泊、当日午前八時廿分晴れて磯の香高い利根川べりから自動車で、君ヶ浜観光道路に堵列とくれつする学童の万歳をあびて、午前八時四十分本台に御到着、関根台長の先導にて、門内に堵列奉迎申し上げる所貝、及びその家族一同の前を御通過、御休憩所無線室に入らせられた。

燈台長より本台の沿革、業務概要及戦災状況等を

奏上そうじょう、陛下には御椅子にもかけさせられず、佇立ちよりつのまま聞し召され「戦時中は色々御苦勞であつた」との有難ありがたき御言葉ごことばを賜つた。応接室及台長官舎は戦災に依り焼失、その爲め無線室を假休憩所として使用したのであるが、燈台長奏上そうじょう中も、無線当直者一名は配置についていた。

無線室を出られて構内戦災焼跡、及び幸ひにして被害を免れた霧信号舎を御巡覧の右、陛下が皇太子当時の大正五年十一月御手植えになつた松樹の緑濃き成長に御満足の御様子にて「大分大きくなつた」と暫し歩を止めさせられた。各新聞社の写真班、又ニュース映画の撮影班等、この時と陛下の御傍近く進み、あらゆる角度よりレンズを差し向け、ここにも時代の変遷が



犬吠埼灯台構内御手植の松を御覧遊ばされる昭和天皇、左は関根燈台長  
(燈光昭和21年9・10月合併号掲載)

痛切に感ぜられるのであった。陛下は御写真にて衆知の茶色の中折帽子に、同じく茶の背広服で、奉迎者に対する御答礼は、帽子右手に軽く会釈をなされる。

本台構内は、比較的粒の大きい砂利を敷き詰めてある故か、陛下には御歩行が多少困難の様に拝せられ、畏れおほいことであつた。

御日程の関係で、燈塔上部のレンズ及び機器の御視察はなく帰路、正門内側に堵列の所員に對しては重ねて「戦争中は色々御苦勞であつた」尚殉職者高木國三郎遺族に向つて「殉職者を出し洵に同情に堪えない」との言葉を賜つた。

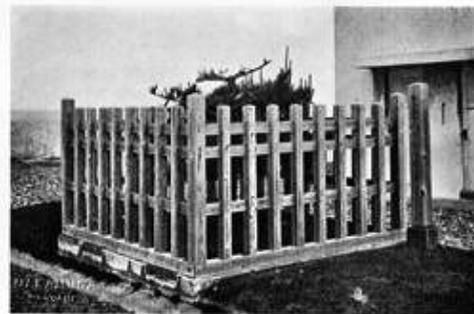
咫尺の間に龍顔を拝し、優渥なる御言葉まで賜り、一同感激深く目送申し上げ、新生日本への期待、又覚悟を各自心に固く誓つたことであらう。

かくて陛下には、門前の御召自動車近く押寄せ、万歳を叫ぶ市民奉迎者に對し、帽子右手に軽く御会釈なされ、歩を車中に運ばれ、午前九時五分退台遊ばされた。

戦争で休刊となつていた燈光は、終戦から1年後に復刊し、翌月号には写真を掲載するまでになつていました。その写真は、天使様とあがめ奉られてきた天皇

陛下を頭上から撮り下ろした、当時は衝撃的な戦後を象徴する写真でした。天皇陛下と共に写された陛下お手植えの松は、構内正門から入って正面の地に柵で囲まれてありましたが、その後工事のため正門脇に移植され、いつの日か枯れて無くなり、平成の現在はその存在すら全く忘れ去られていました。

灯台から職員が居なくなり、彼らが居た痕跡が次々と消え、我らの業務に於ける灯台の比重と並行し灯台に対する意識も年々薄れていく中、お手植えの松が無



松の手植

昭和天皇お手植えの松  
(昭和10年銚子観光協会発行冊子  
「犬吠埼燈台史」巻頭掲載写真)

くなっていたことは時代の必然だったのかもしれない。しかし、お手植えの松は忘れ去られても、忘れてはいけないのは、職員「高木國三郎」の殉職の事実です。

### 戦災と高木國三郎の死

前記の燈光昭和21年7・8月合併号には、犬吠埼灯台の戦災状況と高木國三郎氏の殉職に関する次の記事が見られます。

戦時中は、燈塔其他施設物に迷彩を施し、燈火には上空遮光器を装置し、光力を減じ、或は燈質を変更し、空襲に備へつ、通過船舶の爲に、航路標識としての機能を發揮して居りましたが、昨年七月四日、及八月十日の二回空襲を受けました。七月四日受けましたのは硫黄島より来襲のP51七機でありまして、機銃掃射され、燈台の「レンズ」並に玻璃板に損傷を受け、其他小被害を蒙りましたが、本台在勤員協力応急措置を講じ間もなく復旧致しました。更に八月十日第二回目の空襲を受け、来襲機は主に艦載機のやうでありましたが、「ロケット」爆弾数発、及多数の機銃攻撃を受けまして、官舎一棟焼失、一棟倒壊発散、燈台「レン

ズ」及玻璃板に、再び大損傷を蒙りました。

其「レンズ」は、明治七年横浜燈台寮に於て、畏くも

明治大帝 照憲皇太后兩陛下の勳覧を辱ふせる由緒深きものでありまして、洵に恐懼に堪へぬ次第であります。尚当時上空警戒中の通信書記補高木國三郎は、「ロケット」爆弾破片の爲、双眼鏡を手にせる儘重傷を負い昏倒し居るを發見、直ちに救護に努めたるも、其後約二時間にして、遂に殉職致しましたことは、痛恨に堪へぬ次第であります。

目下其遺族長男は、本台技術員拜命、長女は当所電信局側事務員として勤務、故人の寡婦と共に、本台官舎に居住して居ります。

又其他の施設は、比較的被害少なくありました関係上、一部に応急措置工事を施し、即ち照光器に於きましては八面体「レンズ」の内、比較的損傷に少なき面四面を使用致しまして、従来十五秒に一閃光を發して居りましたものを、四十五秒を隔て十五秒間に二連閃光を發するやう、燈質を変更致しまして、只今航路標識としての使命を果たして居ります。

次に大正五年

陛下東宮殿下にて在せし時、当地方御行啓遊ばされ

し際、御手植の松樹は爾来すくすくと成長して居ります。

この記事の表題は、「奏上の要旨」とされていることから、昭和天皇へ報告されたものと推測されます。

今回、鈴木美代治氏の御子息である鈴木照秋様（最後の犬吠埼航路標識事務所長であり、また最初の銚子航行援助センター所長で退官）から、昭和21年1月21日付け犬吠埼灯台戦災被害調査報告書（写し）を提供いただきました。上記のさらに詳しい記述が次のとおり見られます。

○ 被害の大別

- 燈臺 小破
- イ 燈塔 小破
- 口 燈室より上部 大破
- ハ 霧笛舎 小破
- 無線屋舎 小破
- 第一吏員退息所<sup>りんたいきくしょ</sup> 全焼
- 第二 全壊
- 第三 中破
- 第四 小破

第五 小破

○ 殉職、殉難等の事項

殉職者 技術員 高木國太郎<sup>くにたろう</sup>（國三郎の誤記）

殉職概要 8月10日午前7時20分 対空監視服務中の高木技術員は 全時<sup>ぜんじ</sup> 敵機来襲を発見 直ちに退避

信号を打ち、自己も退避せんとするも時既におそく爆弾破片右大腿部に突き差り出血多量にして 当地派遣陸軍部隊の輸血その他の措置も甲斐なく 約2時間の後 死に至るもの

○ 当時に勤居住家族一覽

- 燈台長 標識技師 関根梅吉 56歳
- 家族三男 巖 15歳
- 標識技手 飯村哲二 46歳
- 標識技手 柳原尚直 29歳
- 標識技手 山代泰男 20歳
- 技術員 高木国三郎<sup>くにたろう</sup> 53歳
- 家族妻 トヨ 52歳
- 長男 奨 25歳
- 長男の妻 よし 21歳
- 事務員 長女 たか子 19歳
- 操機夫 常世田三郎 47歳
- 家族長男 武一 13歳

次男 弘吉 9歳

○ 被襲の状況

(1) 7月4日(第1回)

当日12時35分より約10分 硫黄島よりP51—7機  
第1波3機 第2波4機 東北方超低空にて燈塔並附  
属建物を銃撃 12・7耗機閉砲弾痕約370を数う

燈台 レンズ上・中・下帯に大小多数、瑕瑾、  
折損、脱落し、玻璃板、回転機械筐の硝子破壊し 硝  
子粉のため回転不能 4、5両日業務執行不能、6日  
より 彌縫 措置の上点灯す その他燈塔モルタル  
多数ケ所剥落す。

霧笛舎 側壁鉄板貫通大 概して被害小なるも 1  
号発動機附属重油タンクを貫き 約40立漏出す

無線屋舎 機器共今回は異常なし  
吏員退息所

第一 北東側壁 屋根共弾痕約80、応接間及天井  
壁貫通剥落す スレート飛散60枚

第二 異常なし

第三 弾痕60 屋根側壁天井破損十数ヶ所 壁剥  
離甚だし

第四 弾痕20 内1発貫通 壁剥落 その他外部  
モルタル落す

(2) 8月10日(第2回)

物置 弾痕10 貫通2 モルタル剥落す

敵機動部隊 犬吠東方25哩に近接する情報あり 之  
より発進せる艦載機グラマンF6F7機 全日午前7  
時20分 西方より来襲反復旋回攻撃し、口ケツト爆弾  
9発及20耗機閉砲にて攻撃し来る

燈台 玻璃板北西側より爆弾落下 内部にて炸裂せ  
るものの如く 減光装置レンズ共に大破 遮光器全幕  
共使用不能

燈塔附属舎 南角に爆弾命中 大孔を生じ破壊 格  
納中の備品 工事材料 消耗品 相当量烏有に歸す  
燈塔両側大貯水タンク 倒壊大破す

業務執行不能となる  
無線屋舎 硝子爆風により大部飛散す 送受信機及  
枠型垂直アンテナ切断折損す  
吏員退息所

第一 爆弾2発乃至3発命中 全壊后 洩光弾に

より発火全焼す

第二 爆弾2発命中 全壊す

第三 20耗機閉砲弾痕多数 硝子側壁共殆ど剥落  
す

第四 爆風により北側硝子戸全壊 東西側硝子半

壊

所員居室は第四及第三の一部倉庫等に雑居中  
被爆敵機退去后 第一官舎火焰に覆るを以て 陸海  
軍部隊約2百名(当地武装監視派遣部隊)及附近住民  
応接消火に務むるも 折悪しく西風強く遂に全焼に至  
る 而れ共盡力の功あり 3号宿舎は類焼は免れたり

ここには、犬吠埼灯台の凄惨な被災状況が克明に記  
されています。終戦が間近に迫る夏の朝、米軍機は  
レンズ室や灯台付属舎に爆弾を撃ち込み点灯不能とさ  
せました。官舎も炎上そして次々と崩壊していく中、  
被弾して流血が止まらない高木國三郎氏は発見される



昭和10年当時の犬吠埼灯台職員(上)  
と高木國三郎氏(拡大下)  
(「犬吠埼燈台史」掲載写真)

までの間、この凄惨な地獄絵図をどんな思いで見ても  
たでしょうか。駆けつけた軍隊の輸血治療もむなしく、  
恐らく家族や大勢の人々が見守る中、無念の思いで旅  
立たれたはずです。ただし、駆けつけた人たちのおか  
げで、第3官舎は延焼を免れています。当初霧警号手  
の官舎として建設されたこの第3官舎が、もし西風に  
煽られ勢いよく炎上していたら、隣接の霧笛舎も延焼  
していたことは大いに考えられます。

亡くなられた高木氏に関しては、前記の犬吠埼燈台  
史の職員写真に肖像が確認できます。今回の戦災記録  
から43歳頃の面影であることが確認できました。ただ  
し、他の職員とは異なる装いで、同史が発行された昭  
和10年前後の職員録には在籍記録のない不明な点が多  
い人物でした。その答えは鈴木美代次氏が、燈光昭和  
32年6月号に記した、犬吠埼灯台近隣の茶店に関する  
当時の回想記の中にありました。

この二店(山崎食堂・鮑や)の間にはさまれて「高  
木食堂」と云うのが出来た。主人は先頃までは銚子石  
材会社の現場主任だったが、当時セメントの出現に建  
築材料としての石材が不振になってとうとう廃業にな

りそうなので、丁度灯台の小使が辞めるときだったので、懇望に負け、中沢灯台長を口説いて筆者が世話をしてやった。前の山崎小使が鮑やとの商売仇で灯台から締め出され、その後任が条件付で山崎一族から入れた若者だったが、素行の点で遂に勤まらなかつた。これが入替三度の小使で、然も昨日迄は高木食堂の主人で同等に交際していた人を、今日からは高木と呼捨て給仕もさせるのは妙な遠慮が湧いて来て困った記憶があるが、本人は総てを捨てて忠実に勤めてくれるので、灯台の方ではむしろ大喜びであった。この事が数年後大東亜戦争の殉職に通じていた事は思いがけない不幸でもあった。

次女を当時の犬吠埼電信局事ム員にして、復員した航空兵の長男を技術員として犬吠埼に入れ、遺骨を抱いて二人の兄妹が母を護って犬吠埼に勤めていたのだから、全く山崎を凌ぐ灯台一家が生まれた訳で、当主は今、北海道奥尻の事務所長に栄転している高木焚君である。

小使とは、灯台の業務をサポートする職員で、灯台構内の小使専用の宿舎に、灯台職員と同じように家族と共に住んでいました。掃除や風呂の用意などの雑役

から灯台の様々な業務までをこなす、灯台を正まに陰で支えていた縁の下の力持ち的な存在でした。鈴木美代次氏は昭和4年12月〜同9年9月まで犬吠埼灯台に勤務しており、高木氏はこの間に採用されていることから、同氏はおおよそ15年もの長期間ずっと犬吠埼灯台に暮し灯台を支え続けていたこととなります。小使から職員へ採用された時期は、今回確認できませんでしたが、戦時中は人手不足により、小使を始め地元から多くの方が灯台職員に採用されています。そして、高木氏や沖繩伊江島灯台の職員のように、彼らの中にも戦争の犠牲者が出ています。

終戦の日まであと5日でした。高木氏の無念の思い、家族の悲しみは計り知れません。その思いが、今も戦災で傷付いた初代のレンズに宿っているように愚生には感じられます。

犬吠埼灯台の初代レンズは、長年家族と共に犬吠埼灯台を支え、最後まで命をかけて灯台や家族を守った高木國三郎氏の魂を、その傷跡に永遠に封じ込め、光り輝く天覧の記録と共に戦争の悲惨さを、見る人にもこれからも投げかけていくはずで

## 犬吠埼プラントン会

この犬吠埼灯台初代レンズと、以前に同レンズが展示されていた犬吠埼灯台資料館の設置、そして犬吠埼旧霧笛舎の保存には、地元の犬吠埼プラントン会が大きく関わっています。犬吠埼プラントン会の生みの親であり代表幹事を務める仲田博史様が、犬吠埼プラントン会発足にあたり、当時から犬吠埼への灯台資料館の設置と初代レンズの里帰りに対する熱い思いを持ち合わせていたことを、燈光平成12年6月号に次のとおり記しています。

### ●地方からの発議―犬吠埼プラントン会の旗揚げ

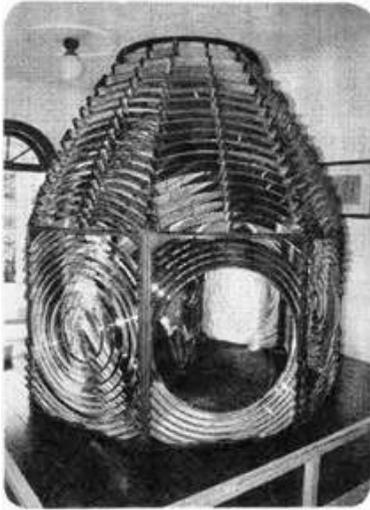
たしか一昨年の夏、二度目に（燈光会へ）訪問した時のことでしたでしょうか、田中常務理事さんから「せっかく銚子から来たのだから」と築賞専務理事さんに紹介され、親しくお話を伺う機会がありました。その時初めて燈光会が公益事業の一環として、各地で灯台資料館の建設をしている事を知り、犬吠埼にも灯台博物館（銚子市サイドでは、当初博物館の呼称を用いていました）ができたならば筆者のような灯台ファンだけでなく、銚子にとってもまちづくりの大きな推進力にな

るだろうと胸を弾ませました。元をただせば、筆者が犬吠埼プラントン会を結成し、三大活動目標の一つに「銚子市が主唱する灯台博物館建設事業への提言」を掲げたのも、銚子市が自ら犬吠埼灯台というプラントンの大いなる遺産をまちづくりに活かす意欲を示すなら、折に触れ市民サイドからその気運を盛り上げるぐらゐのことは出来るであろうと考えたからでした。

顧みますと、啼啄せうとく同時とはきつとこのようなことを言うのだと思います。

秋に入って、銚子市長は、燈光会から事業の詳しい説明を伺う機会をつくりました。

実は丁度この頃、銚子市は翌一九九九年から二〇〇一年までの三年間に「世紀越え事業」と銘打って、日本で一番日の出が早く見えるまち」をアピールし、盛りだくさんのイベントメニューを立案する作業中であり、市長もあるいは灯台博物館が先に行って世紀越え事業の重要な柱になりうると予感したのででしょうか、間髪を入れず積極的に灯台博物館建設を推進する腹を決め、燈光会の灯台資料館建設事業にエントリーする旨意思表示をしたと聞いております。そして程なく、銚子市ご自慢のホームページに「世紀越え事業で残す財産」の一つとして灯台博物館建設の検討を書き加え、



犬吠埼初代レンズ（1999・9 明治村視察）

明治村に展示されていた初代レンズ  
（燈光平成12年6月号記事掲載）

内外に力強く<sup>ズバ</sup>闡明したことは言うまでもありません。今にして思えば随分念の入ったことでしたが、昨年早々、筆者は銚子市のホームページの掲示板上に「発進した世紀越え事業へ……一灯台ファンからの提言」(要約)と題して市行政が灯台博物館実現に向けて頼もしい第一歩を踏み出したことを支持する書き込みや筆者自身のホームページに同提言の全文を掲載し、続いて犬吠埼灯台とその設計者R・H・ブランドンの「研究」及び灯台関係者や灯台のあるまちとの「交流」、「灯台資料館実現への提言」を活動の三本柱とする「犬吠埼ブランドン会」の発足準備に入りました。

〈 中略 〉

九月は、会員五名で明治村に犬吠埼初代レンズと菅島灯台旧附属官舎を視察に日帰りの強行スケジュールで出かけました。この初代レンズこそは明治七年試験灯台にて明治天皇皇后両陛下下の天覧の栄誉と太平洋戦争時の米海軍艦載機の攻撃による一部破損や職員殉職という悲劇を併せ持つもので、筆者は犬吠埼灯台資料館完成の暁には展示の核になるべきものであり、燈光会が明治村に貸与したものであるということも事前に聞いておりましたので、これを里帰りさせることも不可能ではないと思っておりました。当日案内して下さった学芸員さんの方から、「地元で返還の希望があることを聞いております。」と出たのを聞き、明治村としても初代レンズの返還について特別こだわりはないようだとどの感触を得て、遠くまで来たかいたがあったと一回疲れをものともせず意気揚々と帰ってきました。

そして、様々な困難を乗り越え、遂に初代レンズの里帰りが実現し、平成14年3月、同レンズを展示した犬吠埼灯台資料館が建設されました。同年の燈光5月号には、次のとおり見られます。

犬吠埼灯台の初代レンズはフランス製の一等八面閃

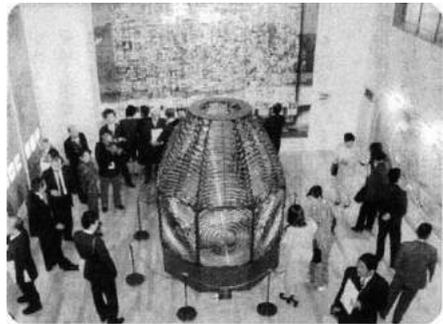
光で、高さ二・六メートル、下部の直径一メートル、重さ約一七〇〇キロもあり、戦災でレンズ二面が破壊されましたが、仮復旧のうえ昭和二十六年四月、現在の一等四面閃光レンズにバトンタッチされるまで使用されていたものです。初代レンズは、横浜の工場に保管後、昭和四十年に愛知県犬山市の明治村に貸し出し展示されていたものを、燈光会及び銚子市民の有志グループ「犬吠埼プラントン会」等の努力により犬吠埼灯台資料展示館に展示することが出来ないかと非常に苦労した結果、銚子を出てまさに「半世紀ぶりに犬吠埼灯台のレンズが里帰り」が実現したものです。

#### 【犬吠埼灯台資料展示館について】

同資料展示館については、建物は鉄骨造り一部二階建て、延べ床面積は約二〇〇平方メートル、総事業費の約六〇〇〇万円は、燈光会と日本財団のほか「灯台は市民の貴重な財産」として銚子市が二〇三〇万円を補助したもので、当日は快晴で非常に良いオープニングセレモニーとなりました。

（ 中略 ）

「犬吠埼灯台資料展示館落成記念式典」では、銚子市長は「銚子市では、犬吠埼灯台の歴史的、文化的価値を見直し、学校教育の場で学習することも意義があ



1階フロア中央に里帰りした「初代犬吠埼灯台レンズ」

犬吠埼灯台資料館に展示の初代レンズ  
(燈光平成12年6月号記事掲載)

ることから、世紀越え事業の後世に残す財産として展示館の建設に協力してまいりました。」等の話があり、また燈光会会長からは「犬吠埼灯台は航路標識としての重要性、規模、歴史的・文化的にも価値ある灯台で、犬吠埼灯台は毎年一五万人を越える観光客が訪れ、令国一を誇っています。」の話がありました。

この5年後の平成19年、音波標識の廃止に伴う犬吠埼の霧笛の業務休止が決定し、霧笛舎の取り壊しの問題が浮上しました。犬吠埼プラントン会の仲田氏は、

この問題にもすぐに立ち上がり、次の7つの提案を掲げ、全力で犬吠埼の霧笛を後世に伝える保存活動を行っています。

1. 理想は↓国の文化財として現状のまま保存
2. 良縁あれば↓移設保存（銚子市内・市外）
3. 解体後↓一部を資料展示室内に展示
4. 欠かせない↓専門家による学術調査及び記録
5. 専門家による霧笛の録音
6. 感謝と活用↓閉所時にイベント開催
7. お楽しみに↓記念グッズの開発

翌年の平成20（2008）年3月には、惜しまれながらも霧笛は廃止されますが、廃止前にプロに依頼し霧笛の音をCD化、廃止時には霧笛舎内での記念公演の開催、その翌年には東工大・千葉工大による霧笛舎の学術調査が行われ、明治の産業遺産として貴重であるとの墨付きをいただき、銚子市長に「霧笛保存に関する陳情書」を提出し、銚子市議会で「犬吠埼霧笛号所の修繕支援費」が可決され、7つの提案を着実に実現させていきました。

そして遂に昨年の12月、犬吠埼の霧笛舎（旧犬吠埼

霧笛号所霧笛舎）は、登録文化財原簿に登録されたことが官報で告示されたのです。

これまでのブランドン会の活動に対して、一昨年11月15日、犬吠埼灯台点灯140周年の記念すべき日に、海上保安庁長官から感謝状が贈られました。また、今年2月3日、犬吠埼の霧笛舎で行われた登録文化財登録証及び登録プレートの伝達式において、銚子市長からも、これまでの保存活動に対する感謝状が授与されました。

この日の伝達式に於ける仲田博史代表幹事の祝辞は次のように述べられています。

犬吠埼ブランドン会を代表して一言お祝いの言葉を申し上げます。

このたび、犬吠埼灯台の灯塔及び日時計に続いて旧霧笛号所霧笛舎が国の登録文化財原簿に登録され、本日ここに登録証の伝達式を迎えることができましたことは、ひとえに海上保安庁、銚子市並びに燈光会のお力ゆえと承知いたしております。

同時に、このことは廃止前から霧笛の保存をテーマとして活動してきた私たち犬吠埼ブランドン会にとってもこの上ない喜びであり、また、たいへん名誉なこ

とだと思っております。

振り返ってみますと、7年前の「廃止即撤去」も論理的にはあり得た曲面からはじまり、学術調査が終了した時点ではある製鉄会社から「銚子でいららないなら九州・山口の近代化産業遺産群の世界遺産エントリーのためにもらい受けてもよい」という非公式なオファーなど流動的な場面もございました。なお、当会の折々の活動については、その一端を式場内に展示してございますので、ご覧いただければと存じます。

ところで、昨年は犬吠埼灯台140周年の年でもございました。当会は、その関連事業として、また登録有形文化財内定を祝し、漫画家萩尾望都先生による講演会「霧笛——永遠というものの悲しみ、生きることのはかなさ——」を開催致しました。その時に今日の日のこともあろうかと存じ、霧笛の複製原画3枚に先生からお祝いのサインをいただいております。それらもこの式場に展示してございます。

また、萩尾望都先生は先月末に発売された漫画雑誌で登場人物（花見ウメコ）に「銚子のまちは海岸が近く、お魚のおいしいところ」と語らせています。もしかしたら11月の講演会のご縁かも知れません。講演会には遠くは鹿児島をはじめ全国各地から約300名の

ファンが銚子に来てくれました。このように文化の影響力には偽りがたいものがあります。犬吠埼ブランドンは、これからも「灯台や霧笛の文化」を掘り起こし、犬吠埼から発信していきたいと考えております。

もう一つ、ホットな話題がございます。今月中旬に銚子出身の有名な作曲家弦哲也先生が『犬吠埼——おれの故郷』という新曲を発表されるそうです。私たちがこれから目指すものは、まさにこの簡潔な曲名の中にあると思います。

つまり、私たち犬吠埼ブランドン会は、犬吠埼灯台や霧笛舎を、銚子で生まれ育った人たちが、グローバル化した世界のどこで働き、どこで生活していても、「銚子はおれの故郷だ」と胸を張って言い切れる、またそのことを人々に思い起こさせる、そんな心の拠りどころにしていきたいと考えております。

何はともあれ、オール鉄製の建物がこの厳しい自然条件の中で105年もの間黙々と仕事をし、2度の大地震、戦争等々の試練をくぐり抜けて現存しているのは、一にも二にも日々手入れを欠かさなかった多くの灯台職員の皆様の努力のおかげだと思えます。これからはもつともつと手がかかることでしょう。今日この日、私たち市民は、関係諸機関と共に地域全体でこの



仲田博史様と  
市長からの感謝状授与  
祝辞を述べる

点をシツカリと認識し、この貴重な文化財を上手に活用しながら後世に伝え残すという使命を友として、前に進む決意を新たにしようではありませんか。

犬吠埼プラントン会が存在しなければ、間違いなく犬吠埼灯台の現状は無かったはずで、灯台の光り輝く歴史と伝統を後世に伝え残していけるのは、業務を優先せざるをえない私たち海上保安庁の職員よりも、今は犬吠埼プラントン会のような灯台を愛してやまない方たちが居なければ、成しえないのかもしれない。愚生もこれまで、幾度となく仲田様から資料の提供や助言等ご支援をいただきました。精力的に活動する姿

には、いつも強い刺激を受けてきました。仲田様の存在は、灯台研究生には、なくてはならない存在となっています。仲田様には、灯台研究生心から感謝しております。不思議なことに、愚生が最初に書いた記事拙稿「観音埼灯台点灯130周年記念によせて(Part.1)」が「燈光」に掲載された平成11(1999)年5月に、犬吠埼プラントン会が発足しています。当時愚生は、初代観音埼灯台を建設したフランス人灯台技師「ルイ・フェリックス・フロラン」に没頭していました。プラントンとフロラン、日本の灯台の礎を築いたイギリスとフランスの両技師が、全く同じ時期に再び日本でよみがえり、導かれるように愚生も仲田様も両技師の母国に赴き墓参し、その後二人共灯台の歴史調査に深く傾倒していきました。仲田様の活動には比較に及びませんが、愚生も微力ではありますが、今後も灯台の調査研究は続けていきたいと思っています。

\*犬吠埼プラントン会の紹介(同会ホームページより)  
●犬吠埼プラントン会とは、犬吠埼灯台について様々な関心を持つ市民が中心となり、1999年5月、現役の近代化遺産ともいえる犬吠埼灯台の多面的な研究及びその動態保存と「日本の灯台の父」と尊称

されているお雇い外国人ブラントンの人物や業績をたどり、それらを顕彰しつつ、あわせてまちづくりへの活用を考える会を結成。

会員は、会社役員、自営業者、建築設計士、元小学校校長、元高校教師、会社員、アマチュア写真家、市職員、高校美術講師、等々、現在男女合わせて約15名。当初活動期間を銚子市の世紀越え事業に合わせ1999年から2001年までの3年間に限定していたが、3大目標の一つに挙げていた初代レンズの里帰りを中心とした犬吠埼灯台資料展示室の実現後の現在も旧霧信号所の保存など、灯台施設をめぐる技術的、制度的変化に対応して地域と灯台のより深い関係を構築すべく様々な活動をしている。

### ●三つの活動目標

一、犬吠埼灯台とお雇い外国人R・H・ブラントンをはじめ灯台の建設や保守に携わった人々についての調査「研究」

二、灯台のあるまち及び内外の「灯台人」との「交流」

三、犬吠埼灯台及び旧霧信号所の保存・活用に関する「提言」、他の市民団体との共同「支援」

今回の執筆にあたり、資料・写真等を提供いただきました鈴木照秋様、第二管区海上保安本部交通部渡辺企画課長（元銚子海上保安部交通課長）に対しまして、この場を借りて改めてお礼申しあげます。

### 追伸

本編脱稿後、犬吠埼ブラントン会記事掲載承認のため、仲田様と連絡をとった際、英字新聞THE JAPAN WEEKLY MAIL. 1874（明治7）年3月21日付けの明治天皇燈台寮訪問に関する記事を提供いただきました。そこには、明治天皇が試験灯台を見学し、灯台のレンズは犬吠埼灯台へ送られると、当時の英字新聞には次のとおり明記されていました。

THE JAPAN WEEKLY MAIL. Mar.21, 1874.

VISIT OF THE MIKADO TO THE LIGHT-  
HOUSE DEPARTMENT.

～ 前略 ～

The Imperial party started from Yedo by the 3 o'clock train and arrived at 4 o'clock at the Yokohama station, whence they at once proceeded

to the Lighthouses establishment. They were accompanied by the Principal Ministers of State, the Foreign Representatives were also present, while the proceedings were further graced by the presence of a number of foreign ladies who viewed them from the upper verandah of one of the houses on the grounds of the establishment.

～ 中略 ～

After this the Experimental Lighthouse was visited. This building has been erected principally for the purpose of training young Japanese Lightkeepers before sending them down the coast,

～ 中略 ～

The lantern which has been erected on the Experimental Lighthouse was built entirely in Yokohama, and is of the ordinary size of 1st order lanterns.

The apparatus now in the lantern is one intended for Inaboye Saki - about 100 miles N.W. of Yokohama, one of the most dangerous points on the coast between here and Hakodate. The Lighthouse is nearly completed, and the apparatus will probably

be sent there in two or three months.

～ 後略 ～

### 【愚訳】

燈台寮(局)への明治天皇(ミカド)の訪問

～ 前略 ～

天皇の一行は、3時の列車で江戸を出発し、4時に横浜駅に到着、すぐに燈台寮へ向いました。一行には県知事や各国の代表が同行し、また西洋の淑女達(しやうじょ)が燈台寮内の建物のベランダから、一行を見守り出迎える華やかな演出を添え、燈台寮へ進んでいきました。

～ 中略 ～

この後、試験(実験用)灯台を訪問されました。この建物は主に、灯台に赴任する前の若い日本人灯台職員を養成するために建てられたものです。

～ 中略 ～

その灯籠は、もっぱら横浜に建てられたその試験灯台に設置されています。一等級の灯籠で、通常のサイズに属するものです。

灯籠内にある現在のレンズ(装置)は、大吠埼(イナボエ埼)向けの予定です。そこは横浜から約一〇〇マイル北西(実際は北東)に位置し、そこから函館ま

での航路上の最も危険な場所の一つです。灯台は程なく完成し、レンズ（装置）は、おそらく2〜3ヶ月後には、そこ（犬吠埼灯台）へ送られるでしょう。

（後略）

仲田様、貴重な資料を提供いただきましてありがとうございます。灯台研究生、これからも精進していきますので、末永くご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひ致します。

犬吠埼灯台 三編 完

# 灯台さんへ

石橋 正



## 〈はじめに〉

私のような古い船乗りは、灯台を守る人達を「灯台さん」と呼んでいた。入港しても直接会うことはあまり無いが、日々黙々と「灯」を守っている人たちの事は常に我々の意識の中にあつた。

戦後暫くして、灯台局が海上保安庁の所属となり、「灯台さん」達も「海上保安官」となり、金ぴかの制服を着るようになった。お叱りを受けるかもしれないが、私は、灯台さんには昔と同じように地味で目立たない制服で居て貰いたかつたと思うのである。

私は、戦時中に教育を終え、あと数か月戦いが続いていたら間違ひなく戦死していた古い船乗りである。終戦直後、日本水産の小型トロール船（重さ200トン。煙突の長い石炭焼き蒸気エンジンの古い船）の見習い（海抜免状取得のために必要な現場実習）として、徹底的にどん底生活の中で扱われた。名前だけは

Apprentice Officer（アプレンティス・オフィサー）、つまり見習い航海士であるが船内での取扱われ方は最下等のセラーであり、むしろ現場にとっては、員数外の邪魔者であつた。

半年後、母校の練習船の3等航海士見習いとなつたが、月給は確か90円。民間の10分の1くらいであつた。当時は民間漁船が急増、航海士資格を持つていればどこでも雇つて貰え、官公庁の船は給料が安いので乗り手が無かつた。私は戦時中の勉強不足を取り返したかつたので、練習船を選んだのであつた。当時の灯台職員も、ひどい薄給であつたはずで、その中、よくあの仕事を頑張つておられたと思う。

その後、海軍で習つた電測（レーダー）や水測（水中測的機）の理論が一般の船にも導入され、非常に興味があつたので、研究所で暫く勉強させて貰うことにした。しかし、それは長続きしなかつた。研究所所属の調査船が事もあろうに進駐軍の火薬運搬船に衝突、

人的被害は無かったものの、船長が即刻クビになってしまった。その船は東北・北海道沿岸の調査にでる寸前だったので、後任の船長が急要であった。しかし前途したように安月給の公務員になろうとする船乗りは居らず、免状さえ持っていれば誰でもよいということになったらしく、突然、22歳、3等航海士の経験しかない私に乗船命令が出たのである。幸い、私はその船の建造の折り、勉強のために関わらせて貰った事があり、全く無縁ではなかったのだが、半ば操り人形のように船長の辞令を受けたのであった。

海図や水路誌を慌てて眺め、先輩達にも助言を求め、練習船の頃通った僅かな記憶を頼りに北へ向かったのであった。後日、私に船長を命じた上司は、私の航海中は（心配で）眠れなかったと述べられていた。

前置きが大変長くなってしまったが、この若輩であった私がレーダーもジャイロも持たない小型船で何とか航海を続けることが出来たのは、まさに整った航路標識のおかげなのである。灯台の光、航路を示すブイ、そして霧笛……。どの位助けられたことか。現在のように航海計器の整備された船の航海者には、想像もつかない事であろう。

「フレア」という言葉を確かめようとしたが、海事関係の辞書を調べても、私の思っているような語訳が出ていないのがっかりした。

フレア……。遠い海から帰って来て、日本の灯台のフレアが見えた時は、本当に嬉しかった。この「フレア」を正しく訳出している書を見つけたかったが、「扇形に切ったスカート布地」と出ているものを暫く漸く一つ見つけ、少し納得した。「光扇」とでも訳したらどうだろうかと考えてもみたが……  
こんないい句もある。

冬涛を追う灯台の灯の翼

石田 智規

小さく薄く、しかしハッキリと右から左に流れる光條を、初めて水平線上看つけた時の嬉しさ。その喜びは、若き練習船であった時も、老船長となって海に出ていた時も変わらない。暖かい、まさしく「母国の灯」なのであった。

北太平洋を横断して初めて見る「あかり」、それは落石埼の守り人が点じてくれる灯である。南の海から北上して来ると野島埼か石廊埼で、そのフレアがみれると、「ああ、帰って来た」と思う。特に練習船の場

合は、日本に近づく、夜、多勢の学生がフォックスルに寝転んで一心に前を見ている。そして、小さく小さく野島のフレアが見えた時、彼ら——柔道部や空手部の猛者たちも、子供のように喚声を上げるのである。「純情」そのもの、偽らざる「心からの歓喜」の湧昇である。

私はブリッチヂから、何回も同じような生徒達の姿を目にした。そして、人間が本来持っている「素直な感情」の発揚の場に、共に居られた事を改めて幸いに思った。

私は前途のように、終戦直後、実習のため小さなトロール船に見習いとして乗船した。小説「蟹工船」を下回るような過酷な環境であった。初めての実習船なので何もわからず、事ごとくに怒鳴られる。「アップ（アプレンティス・オフィサー 見習い航海士の略）！キサマ目が開いているのか！」「アップ！てめえ人間になつて浅いのか！」「バカアップ！」「くされアップ！」の毎日である。

当時の漁船は学問的知識は全く不要。体力の勝る者が幅を利かせていた。特に学卒者は苛められた。今なら人権侵害問題にもなるだろう。しかし私は3年間、

海軍で心身共に徹底的に鍛えられており、何よりも、いくら辛くても、戦時中のように強制的に「死」を約束させられる事が無いのが、最大の救いであった。そんな生活の中、東シナ海でレンコ鯛を満船し帰途に就こうとしていた時、突然船頭（船長）がブリッチヂから私に怒鳴った。

「アップ！星で（船の）位置が出せるか？」

六分儀を使って船位を決めることは練習船で教えられていた。同級生でマグロ船に実習乗船した者も居たが、ブリッチヂで天測をしていると、デッキで作業中の船員から「早く降りて来い、サボるな！」と罵声を浴びせられたという。遠洋漁業科出身者が必ず通る、つらい一場面であった。

「星で船の位置を出せ」という船頭の声は本当に嬉しかった。幸い私は子供のころから天文に興味があったので、星を間違える事はなかった。漁撈作業でがさがさになった手に懐かしい六分儀を握りしめ、懸命に星を追った。そして何とか船位を求める事が出来た。すると船頭は、何も言わず、そのまま私の出した地点から、日本への進路線を引いたのであった。信用してもらえて更に嬉しかったが、果たして自分の出した位置が100%正しいかどうか不安でもあった。多数の

乗組員から、「大丈夫かよー」という不信に満ちた声を浴びせられてもいたのである。

日本が近くなつた頃、私は何時間も船首に立ち、風の時々はマストの頂上まで上つて正面を睨んでいた。

——そして、ついに、小さく、しかし確かな「フレア」を発見した。それも、ほとんど船首方向に！大瀬埼であつた。

船橋の手摺を握りしめ、私は秘笑した。「会心の笑み」ではない。不安が一举に霧散するような、何か心地よい透明な流れのようなものが、全体を通り抜けた感じがした。理屈抜きに嬉しかった。そして気付くと、目が潤んでいた。小さなフレア、「灯台さん」達のともしてくれる暖かいフレア。昭和21年、この時の嬉しさは、私は一生忘れる事が出来ない。

浦三崎の漁港は、今はすっかり寂れてしまつたが、マグロ漁業の盛んな頃は、岸壁に水揚げの順番を待つ漁船が二重三重にも横着けていた。私も何年もこの港を基地にしていた時があつたが、街の景気がよくなり、方々にネオンの灯りがともるようになった。又、長い航海を終えて入港するとき、若い船員達にとつて城ヶ島灯台の灯りは喜びを倍増させるものであつた。

しかしある時、私は入港時に港の防波堤の赤灯台の

すぐ側に、赤いネオンが輝いているのを見た。そして、灯光と見間違ふ怖れがあるのではないかと不安を感じた。その直後、船長仲間が大声で雑談している中に、「あの、新しく付いた赤いネオンで入港進路を間違えて危ない思いをした」と言う声を聞いた。確かに見誤りしやすいネオンなので、当時、海が好きだった市長さんにストレートで陳情したところ、すぐにそのネオンを消してもらふ事が出来た。

三崎に入港して来る船が、よく城ヶ島と江ノ島の灯台を見間違ふという話も聞いたが、両灯台とも単閃白光であり、間隔が、城ヶ島が15秒に1閃、江ノ島が10秒に1閃である。

また、それよりも以前から、多くの沿岸漁船から危険な「亀城礁」の話をよく聞いていた。昔、長井は東京湾に入る前の「風待ち港」であり、多くの船が利用しており、昭和40年頃までに、岩場にビット（係船柱）が残っていた。暗礁は、波のある時はすぐ判るが、夜間や風の日の満潮時は、その存在は全く判らなかつた。昭和53年頃、私は、色々航海法規についてご指導を受けていた横浜海難審判庁の瀧川文雄審判長に、礁の危険性についてご説明したことがあつた。すると、以

前からそのような噂をご存知だったらしく、私に現地の案内を依頼された。そして、関係者数人（おそらく灯台局の方もおられたと思う）と共に長井の海岸に來られ、私に説明を求めつつ礁の様子を視察された。

そして間もなく、礁に灯台を建てる工事が始まったのである。長い間苦勞して來た漁民の不安に即刻対処していただけた事に、私は心からお礼を申し上げたのであった。連続した9閃光という、見誤り難い灯台であつた。

霧の時期、三陸沖を航行する事は何時も難行苦行の連続であつた。少し沖に出ると、北航、南航する大型船と会うことが多く、沿岸近くを通ると小型漁船や定置網に気を付けなければならなかつた。まさに「霧中模索」である。そんな時、「灯台さん」が鳴らしてくれる霧笛がどんなにありがたかつたことか。

かくまでも疲れしものを今宵また

あかり求めて吹雪く波間に

三河 正男

霧の中、灯台が近いと予想される時は機関部員や司厨員まで動員し、デッキ、ブリッジ脇、マスト頂に立たせて、何か音が聞こえないか、全員真剣に耳を澄ま

せていた。ブリッジは私が1人で舵とテレグラフを扱ひ、航海士に音響測深儀（当時はまだ「魚群探知機」とは言わなかつた）を睨ませていた。

霧深く漂う夜の海を航く

盲の如き気配り持ちて

及川 帆彦

海岸に近づくと、「流れ物」を見つける事があり、「陸が近い」と判断出来る。貝や海藻は海中にあると匂いはしないが、海岸に打ち上げられると匂いを発するので我々は船側の海面を注視し、それを敏感に嗅ぎ取ろうと苦勞した。また、鶏鳴や犬の鳴き声はかなり遠方まで届くものなので、陸岸が近いと思われる時はエンジンの回転も止めて船を流し、全員が身体中を耳にするのである。そんな中で「霧笛」の一声が聞こえた時の喜び。デッキの方々に小さな喚声も湧くのである。灯台さんが鳴らしてくれる霧笛。どれだけの船乗りがその音に感謝し、導かれたことか。

釧路に入港しようと濃霧の中、停止・微速を繰り返して動いている時、突然近くで「長・短・短」の汽笛が聞こえたのである。これは運転不自由船か曳船の信号なので、私はすぐに停止し、後進をかけてその場に

止まった。霧中信号を鳴らしながら近づいて来たのは、曳船であった。私は港が近いことを知り、すぐ曳船の進路をコンパスで確かめ、その「ウラバリ」で静かに動き出した。(ウラバリとは正反対側の進路の事)間もなく釧路防波堤の霧笛も聞こえ、無事に入港する事が出来た、という事もあった。

霧の多い季節、今は嘗ての我々のようにそーっと走っている船は無いと聞く。私の教え子で東京・北海道を結ぶ大型フェリーの船長がいたが、濃霧の中でも20ノットを越す全速で走るといふ。授業で「霧中適度の速度とは、視界の半分位の所で停止し得る速度」と厳しく教えたのであったが、彼が言うには、「今は連絡する列車の時刻に合わせる事が大事。レーダーを2台廻し、衝突予防装置も働いているから大丈夫です」

これには驚いたが、日本郵船の「飛鳥」で濃霧のアリユーシャン列島沿いに走った時も、全く速度を落とさなかったのを思い出した。

## 〈江ノ島灯台〉

昔、江ノ島に建っていた三角形の、高さ46メートルもあったヤグラ灯台の話を知る人も少なくなかった。

この灯台の前身は、以前二子玉川にあった遊園地(よ

みうりランド)の落下傘塔で、ベルトでしっかり体を固定させ、頂上から勢いよく落下させてスリルを味わう子供主体の遊具であった。

大戦が始まり、極秘裏に落下傘部隊が編成され、選抜された兵士の猛訓練が行われていた。その一環として、航空機から飛び降りる前の模擬降下も実施することになり、遊具に目を付けた軍は、急遽遊園地を接収、子供達が使っていた落下傘塔を整備してこれに当てることとした。兵士たちは、玉川電車を利用して集まるのであるが、落下傘塔部隊の存在を知られないように、軍は中学校に余分の学生服を集めることを要請、それを塔に集まって来る兵士に着用させた。

ここで訓練を終えた落下傘部隊は、パレンバンとメナドを奇襲、軍用必需の油田を確保したのである。

そして、終戦。戦争は終わっても遊園地の開園は早急に出来ず、落下傘塔は国の要請に応じて解体され、1951年に、近くにあった江ノ島に移設、灯台として生まれかわったのである。もともと遊具であったものに灯台としての機能を取り付けた訳だが、その後、老朽化が進み、新しくスマートな現在の灯台に建て替えられた。

後日、落下傘部隊の生き残りの老人達が集まって昔

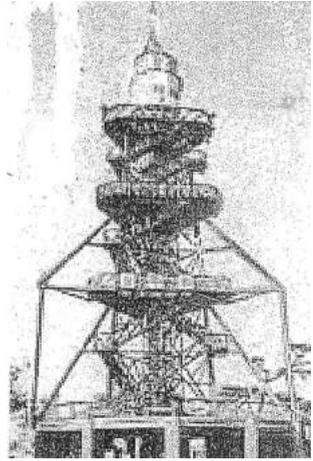


図-1

話をしていた事もあったが、鉄塔時代のこの灯台が軍用であった事を知る人は、もうほとんど居ない。

### 〈大島・三宅島灯台〉

伊豆七島線に沿って北上している時、いつもX Aの音を聞いていた。視界が良い時でも受信機のスイッチは常に入れていた。あの「ツートトツ・トツ」の音を聞くと、なんだか安心するのである。GPS万能の今、あの音はまだ続いているのであろうか。

私の住んでいる所は、真南に大島が見える。三原山が噴火した時、赤い火も見えた。そしてその時、住民の安否を思うと同時に、「ツートト・ツ」は大丈夫だろうか心配した。

三宅島の灯台も、見つけると安心出来た光であった。それだけに。大噴火の折り、溶岩流が灯台の方に流れている事を知って、灯台さんは大丈夫であろうかと一人心配であった。後日、灯台のすぐ近くまで溶岩流が押し寄せた事を知り、灯台さんのご苦勞を憫んだ。なお、この灯台のある「サタドー岬」とは、ヒンズー語で「地獄」という意味であった。

### 〈外国の灯台〉

外国の灯台にも大分お世話になったが、オーストラリア南西端にあるユアン灯台には思い出がある自船で南氷洋まで行った事はないが、フリーマントルを出て南下する時、その灯りが見えなくなると暴風圏の近い事を知る。そして逆に、荒れた海から北上して来てその灯りを見つけた時、「ああ、ここまで来た」と頬が緩むのであった。

イースター島へは数回寄港したが、ここには長く灯台が無かった。嘗てアメリカが島に灯台を作ってやろうと申し出た時、島の人は、「灯台が出来たら、余計な旅人が来るようになるからいらぬ」と断ったそうである。しかしその後、島がスペースシャトルの緊急

着陸に指定されてから、灯りが着けられたようである。

なお、イースター島の東に「サライ・ゴメス」という岩礁があるが、何故か、どの地図を見ても大きな文字で礁を標してある。そのため、地図を見る限り、実際に行った事のない人は大きな島と思うかもしれない。(何故この礁だけ大きな字で表示されているのか、私には判らない)ここは、海面上に岩が僅かに出ている、草木の一本も無い大きな岩礁であるが、魚や貝が豊富なため、イースター島から来て上陸する人達も居るといふ。(ただ鮫も多く、巨大な鮫に襲われたという事故もあった)

イースター島が次第に観光地化し、チリからの船便が増えたためか、現在は、この岩礁には灯台が建てられている。

ニュージーランドに向かう時、必ずニューカレドニア南端の小島にあるヌメアの灯台を見る。細い背の高い灯台であるが、56メートルの高さは、今、世界最高だと言う。これは、ナポレオンが王妃の誕生祝に建てたものだが、随分と粋な事をしたという。

船涼し百年守るアメデの塔

橋本

充

高さで思い出すのは。横浜マリントワーの頂上にあつた灯台で、高さが104メートルあつた。消灯してしまつたがこれこそ、群を抜いて世界一であつた。

南太平洋を横断する時、よく、タヒチから南緯15度線を漁場調査しながらチリに向けて、一路東へ走つた。その時、陸の灯の最後に見えるのがタヒチの灯台であつた。ペパーテの公園の中にあつたが、綺麗に手入れの行き届いた灯台であつた。

初めてインド洋に出たのは昭和28年であつたが、当時、外国の沿岸近くに寄ると、拿捕されたりするので、なるべく陸地から離れて航海した。南支那海は、フィリピンの島沿いのパラワン水道を通るのが通常であつたが、私の船はまだレーダーを持たなかつたので、その場所を通る自信がなかつた。そこで、西風が強吹する時に使うベトナム寄りのコースを、天測を頼りに南下した。

南支那海は暗礁が非常に多く、海図に「危険海域・通航不可」と書いてある場所もあつた。そこは、現在問題となっている南沙諸島、敗戦までは日本領土の新南群島である。この群島が、戦争で占領したものでなく、昭和7年、日本の探検隊が発見して「新南群島」と命名した事を、知る人も少ない。

3か月ほどインド洋で調査をして帰途に就く。私は台湾南端のガランピ灯台をかわして、すぐ北に進路を取った。「紅頭嶼」を見て行きたかったからである。その名の由来は、日が沈む時、この小さな島の頂上が紅く染まるからであった。現在は、胡蝶蘭の原産地という事で「欄嶼」と呼ばれている。私が憧れたのは、この島は島民が皆健康で、病人が居ないとして有名だったという理由である。

強い黒潮の流れに押され、船は快適に北へ。薄暮、隣村の灯りも、島の北端にある欄嶼灯台の光も穏やかに暖かく、私はブリッジの外に暫く佇んでいた。長い間憧れていたこの島。船長になってまだ日も浅く、波に揺られて物思いに耽る余裕など無かったが、そのひとは、まさに心の救いであった。

最近、近海をゆつくり走る機会が無いが、若い頃、港の入り口にあったベル・ブイ（打鐘浮標）にもお世話になった。霧の中でその小さな金の音を聴くと、「暖かい港」が近くなったという安堵で、張り詰めた神経も和んだものである。

「ベル・ブイ・スピークス」という添え書きのある小さなスケッチブックを見た事もあるが、特に印象に

残っている場所が二つある。ひとつは揚子江入口にあるブイである。上海に入る時、河口を探するのが大事であるが、その近くの海底は平坦で水深にほとんど変化がなく、どの位河口に近づいたか、霧中では判断がつかない。

海軍水路部では、重要な海域に推選航路を指示していた。上海に向かう時も、佐多岬の南にある硫黄島や草垣島の北を起点として、真西に向かって直線のコースが示されてある。揚子江が近づくと、所々にブイがあるが、最も重要な所には鐘を鳴らしてくれるブイがある。手探り状態でそーっと走っていて、その音が聞

The Bell Buoy Speaks.

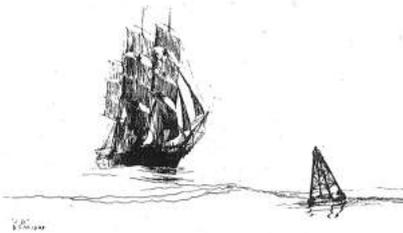


図-2



図-3

こえると、まさに「ベル・ブイ・スピークス」である。揚子江入口に向かう船が、どの位その地味な、しかしハッキリした音に導かれたことだろうか。

もう一箇所、いつも気を付けていた場所は、ニューヨークの自由の女神の前にある二つのベル・ブイである。今はその音を頼りに入港する事も無いと思うが、まだブイは昔と変わらぬ位置に設置されたままである。このベル・ブイの存在を知らない人も多くなつたが、特に船客はここを通る時、耳聴く鐘の音を捉えると、自由の女神が鳴らしているものと思ひ込んでしまふ。水路の両側に浮かぶ小さなブイ。昔、霧の中、極微速で入港して来る船は、その音を頼りにニューヨークの岸壁に向かったのである。



図-4

### 〈鮫角灯台〉

青森県八戸鮫港を基地として、何年か漁業調査に従事した事がある。防波堤が小さく、その沖に2隻の1万トン級タンカー（戦時標準船）を沈めて波除けにしていた頃である。夏は霧の多い所で、出入港には大分苦勞した。小高い場所に住んでいたが、霧が、土手のように沖から静かに押し寄せて来ると、鮫角灯台の霧笛が鳴り出す。その音は、鮫の町全体にも聞こえる。終日鳴り続ける事もあったが、決して「うるさい」という感じのものではなかった。

霧こめて山背吹く夜は海荒れて

鮫角灯台は灯を点したり

山村 陽一

鮫の町の裏山には色々な種類の野鳥が居て、自宅の植木に飛んで来る事も珍しくなかった。カッコウが来る事もあったが、太陽の位置がやつと判る程の濃霧の中、すぐ目の前の梢で、霧笛に合せるように啼いていた事もあった。都会育ちの私にとっては、実に貴重な経験であった。

日輪は淡く 霧笛と郭公と

古い日記に、季語が二つ入った句が書いてあった。

### 〈余部灯台〉

兵庫県香住は大きな漁港であるが、一度陸上から行った時、近くの海岸の名所を廻る遊覧船があるというので行ってみた。小さな船であったが、船長が若い女性でガイドを兼ねていた。暫く西に走り、有名な余部鉄橋のガイドに続けて、「余部灯台は日本一高い」と誇らしげに語っていた。確かに見上げるような高い所に灯台があったが、その急な崖の所に小さな集落が見えた。そして、それが「平家の落人部落」だと教わった。人里遠く離れた崖の上にひっそりと暮らしている人達。あまり街の人達との交流も無く、自給自足の生活が続けているとのことであった。私はどうしてもそこへ行ってみたくなった。更に、余部灯台がそのすぐ側にあるというので、香住の町からタクシーを頼んで、急坂を上がってもらった。

崖の上の僅かな平地に塊つて建てられている質素なしかし小奇麗な一群の住居。人影も無く、松風以外、何の音もない。不思議な集落であった。そして、その

すぐ近くに、余部灯台があった。茂津多岬と高さを競ったと言うが、沖を通る時、遠くから実によく見える灯台であった。

この灯台を守った「灯台さん」達は、きつと落人部落の人達とも仲良く暮らしていたことと、想いを巡らせたのであった。

遊覧船は灯台の所から変針して港に戻ったが、この若い女性船長が香住の水産高校出身であることを知り、入港するまで話が弾んでしまった。

### 〈鮧ヶ埼灯台〉

岩手県宮古港を基地として、昭和23年から数年間、底魚調査に従事した。宮古は奥まった静かな港であるが、入口にある鮧ヶ埼灯台は重要な目印であった。しかし、私が見たのは、戦争で無残に横倒しにされたままの塔で、夜はたつたひとつの裸電球が点けられていた。それでも大事な目標である事には変わりはなく、懸命に夜闇の中に灯りを見つけていた。

灯台は、目立つ所に立っているのので、敵軍にとって格好の標的であり、資料によると、実に多くの灯台が攻撃されている、全く反撃も出来ず、ただ黙って砲



図-5

撃に晒されていた  
灯台。戦いとは実  
に無情であり、悲  
惨である。

私は長い間この  
灯台にもお礼に行  
きたいと思ってい  
たが、平成4年秋、  
目的を達成するこ  
とが出来た。あの  
横倒しにされてい  
た塔に、手を合わ

せたかったのである。しかし、重茂半島の東端に行く  
のは大変な事であった。幸いに同道してくれる人があ  
り、日に数回しかないバスで（乗客は我々2人だけし  
か居なかった）、確か「姉ヶ崎」というバス停で降り、  
雑木林の中の獣道のような小径を、ひたすらくねくね  
と歩いて行った。現在、灯台までハイキングに行く人  
が増えたと聞くが、当時、灯台の仕事以外、この道を  
辿る人は無かったであろう。私達は、拾った棒切れを  
杖代わりにつきながら、クマの出現に少々怯えつつ歩  
いて行った。時々息切れしそうになると、山歩きの経

験もある同行者が、道端に生えている山椒の葉をちぎ  
って渡してくれた。野生の山椒の葉は強烈な香りで、  
何よりの気付け薬になった。

漸く灯台に着くと、立派な白い塔が再建されていた  
が、私の求めていた昔の塔の姿ではなかった。古い基  
盤でも残っていないかと周囲の草むらも探したが、何  
も見つからなかった。ちよつとがっかりしたが、気を  
取り直して、何時もそうしているように塔に手を触れ、  
「ありがとうございます」と小声で言って、また1時  
間かけて、山の細道をバス道路まで戻ったのであった。

地球の弧見むときたりしとどが崎

やませ冷たく流れてやまず

井口 好平

### 〈東京灯船・本牧灯台〉

東京港の入口にあった東京灯船。陸軍の船で、船舶  
兵が何に使ったのか判らないが、妙な形の小さな船で  
あった。入港経路がこの灯船のどちら側にあつたか記  
憶にないが、いつも、ゆらゆら揺れている小さな船の  
すぐ側を通っていた。

またこの船で思い出すのは、ドックに入れて手入れ

をする機会がほとんど無いので、当時、最も強力な船底塗料（確か、ザップコートと言った）が塗られていた事である。

もうひとつ、入口にあって重要な目標として我々が大事にしたのは、本牧の灯台であった。小さいが、「変針点」の唯一の目標であったあの灯台は、今、どうなっているのだろうか。埋立てが進み、海岸から遠くなくなってしまったと言うが、何時か探しに行こうと思っ

### 〈蓋井島灯台〉

航海当直の責任者として初めて灯台のお世話になったのは、戸畑港を出て日本海を北上する時に見た蓋井島であった。8時〜12時のワッチであったが、私は夕食後すぐブリッジに上って、当直中の1等航海士から色々指導を受けていた。そして8時、1等航海士は一言「お願いします」と言っ下橋された。ベテランの操舵手が巨大な舵輪を握って立っていたが、私はずっと前に寄って前方だけを見ていた。そして、変針点である蓋井島の灯台が近くなかったので、船長に報告に行った。

船長の「オモーカージ、コース〇〇」の号令があり、

操舵手が勢いよく舵輪を廻し、「コース〇〇、ヨーンロ」と答えた。そして、間もなく「頼むよ」と一言あって、船長も帰られた。

——それから4時間、生まれて初めて、1船の指揮を任された重圧感。——

遠ざかっていく蓋井島灯台の灯りは、私を激励してくれるようであった。

それから40年後、灯台への「お礼参り」の旅で、小さな渡船で島に渡った。灯台の姿は高い崖の上に見えていたので、港でそこへ上がる道を探ねたが、「あの道は草木が深く、地元の者も行かない。たまに営林署の人が登るくらいだね」という返事であった。「なんとか行けないでしょうか」となおも訊くと、「とてもムリ、ムリ。通れない。マムシがいるし」と大きく手を振った。仕方なく、私は海岸から塔を見上げただけで帰りの渡船に乗ってしまった。

しかし私は今でも、21歳のあの日、蓋井島の大きな灯りに見送られて初めて日本海を北上した時の事を忘れてはいない。（この灯台が、航路上、非常に大事な灯台である事は、恥ずかしながら、初航海、駆け出しの3航であった私はまだ知らなかった）

## 〈襟裳岬灯台〉

襟裳岬の灯りにも、長い間お世話になった。鯨角の灯りが見えなくなると、泊（とまり）の灯台（正しくは「白糠」であるが、昔からの集落の名の「泊」と呼んでいた）が小さな漁村の灯りの中に見えた。そして、それが遠ざかる頃、「絶対に近寄るな」と言われた灯台の中のひとつ、尻屋崎が見えて来る。そして、頼もしいその灯りを起点に、コースを襟裳岬に立てる。

毎年10月になると、このコースを通過して北海道沿岸の調査に向かったが、ここは広いように見えて行合いの船の多い海域であった。私は必ず長い時間ブリッチに居り、襟裳が正面に見えて来るとほっとした。そして、絶対に近寄るなど教えられた灯りを左にかわして走った。

灯台の一閃したる闇涼し

星野 椿

今、名前が変わったが、広尾（ひろう）という小さい港があり、防波堤の中によく錨泊した。ここの「灯台さん」も親切な人で、何回も宿舎に呼ばれご馳走になった。「旅の人」と呼ばれた時代であった。小さい港

の人達は、我々を「旅の船」「旅の人」と呼んで親しくしてくれた。

襟裳岬。そこへ行くには、「黄金道路」と呼ばれた急な崖際の道を通らなければならない。道路を造るのに、「道に黄金を敷き詰めた位」多額の工費がかかったために、そう名づけられた。しかし、現在のように自動車を持つのがあたり前の時代と異なり、当時、この道を辿る人は少なかった。そして、冬は激浪が打ち上げて氷結してしまい、危険で通行する事が出来なかった。

ある冬、広尾港から少し西に、「フンベ」という集落があるというので黄金道路を歩いてみたが、一面に氷結しており、それも崖の方に傾斜しているので、とても歩けるものではなかった。

その遙か先にあるあの灯台。

途中に、昔、沖で遭難し、大勢の人が打ち上げられたので名が付けられたという「百人浜」という荒れた海岸もある。そういう環境の中で、当時の灯台を守る人達は、冬、どの様にして暮らしておられたのか、想像もつかない。

以前、独特な歌い方をする歌手が、「エリモの春は

何もない春……」と歌って地元の人々の反感を買ったが、間もなくこの歌が大流行し、知名度が上がったというので、今度は逆に喜ばれたという話もあった。

最近、息子の運転する車で数十年ぶりに灯台を訪ねたが、付近の変貌には一驚した。観光地になり、近くにホテルまで出来ていたのである。

灯台の下から、延々と沖まで続く暗礁。それが如何に危険な場所であるか、そして、この灯台が長い歲月、懸命にその場所を照らして危険を教え、多くの船人達に如何に頼りにされ、感謝されたかを知る人も、少なくなってしまう。

襟裳の他にも、茂津田、水ノ子島、女島等々、大変な所に灯台があり、そこに「灯台さん」が居たのだが、今、その人達がどんなに苦勞して船人のために灯りをもとしてくれたかも、忘れられようとしている。

私は、船乗りから足を洗ってオカの生活に入ってから、暇を見つけては不便な所にある灯台を訪ね、冷たい塔に手を触れ、「ありがとうございます」と言う旅を数十年続けて来た。誰もいない、訪れる人も無い灯台は寂しそうであった。

灯台の人無き径や赤とんぼ

後藤 松乃

でも、こうして、その灯りに礼を言いに来る老船員も居た事を、知ってほしいと思う。

余談であるが、朝日新聞が「行ってみたい岬はどこか？」というアンケートを出した事があり、「襟裳岬」は第3位であった。老船員の記憶に残る、荒涼たる弧愁の地であった襟裳は、もう昔日のものなのであるか。因みに、アンケートの第1位は宗谷岬、2位は「知床岬」であった。

### 〈階上岳灯標〉

岩手県北端の久慈から北上し、八戸に向かう時は、ほとんど目標に使える地形が無く、少し内陸に平たい階上（ハシカミ）岳が見えるだけであった。しかし、この沿岸には暗礁が多いので、少し離れて航行するのが常であった。私が初めてこの場所を通ったのは、終戦直後の事で、その時、地名を「ハシカミ」と読むこと、またこの山を航海の目標としている事を教えられた。そして、通常、灯台は海に近い所にあるのに、ここでは海岸から大分離れたこの山に小さい灯りが点いていて、古くはそれを目標としていた事も知った。

長い間沖を往復していたが、その度、方位線もとる

事が出来ないようなこの平たい山を大切に扱った、昔の人の事を考えていた。そして、何時か、沖行く人が頼りにしていたその灯りの存在を確認したいと思っていた。

その願いは、遂に1993年の夏に叶えられた。

私の教え子たちは皆、立派に育ち、ヨットで世界一周しギネスブックに載った男。魚で博士号を取り、大学教授になった者。東京湾のパイロット。海底調査で有名な「しんかい6000」の司令。何万トンもの船舶の船長・機関長・通信長。誠に多士済々、全て私の宝物なのであるが、そのうちの1人に水産高校の校長になった者がいる。階上岳灯標のあった場所に、大変な草叢を分けて案内してくれたのが彼であった。山登りに慣れない私は、蛇を追い払いながら、必死で後ろについて行った。

山頂の森の片隅に、小さな塔があった。そこからは低い山であるのに、確かに海がよく見渡せた。この様な不便な所で、毎夜菜種油を燈心に染み込ませた小さい灯りを、沖行く舟人のために点じてくれた人達、間違いなく「灯台さん」である。

なお、この灯りについては、平成元年、地元の有志が登山し、菜種油を用いて250年ぶりに点灯し、沖



写真-1



写真-2

に出ている仲間を確認させたいということである。この「燈明堂」は今後また、何かの折に、話題に上るものと思う。

### 〈御前埼灯台〉

GPSや魚群探知機が普及する前、漁業探索にも灯台は大切な役目をしてきた。そのひとつの例、それは、御前崎沖の漁業探しである。御前崎の沖に「金州の瀬」という大事な漁場がある。狭い所であるが、魚がよく集まるので、重要な場所であった。小さな釣漁船は、図のように、御前崎の灯りと北極星を合わせ（トランシット・ラインと言っても誤りではない）真っ直ぐに沖に出るのである。そして、灯台のあかりが見えなく

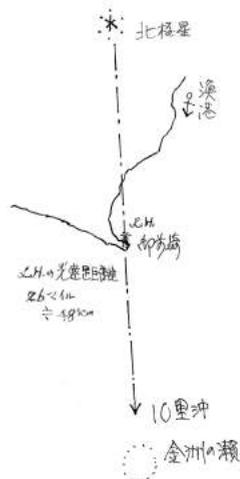


図-6

なったのを確かめ、漁を始めると言う。この背の位置は、灯台から「10里沖」と言われていたが、御前崎の光達距離は25マイル（約48キロ）、まさしく灯りが見えなくなる頃、瀬に近づいたことになる。

漁場を探すのに、「山立て」や星を見定める方法は多く使われており、また、船位を求めるのに灯台のお世話になるのも当然であったが、星と灯台の組み合わせというのは、珍しい手法であった。

### 〈閑話休題〉

「汽笛一声新橋を」で始まる「鉄道唱歌」はあまりにも有名であるが、その標題に「地理教育」と書いてある、子供達の地理の勉強の教材として作られたように、1駅毎に簡単な名所史跡等を歌い込んである。東京から神戸までの第1集から、全国に汎る第5集まで、

実に334番まである。そして、その他、北海道や方々の支線の歌も作られている。

それらの歌の中に、灯台を歌い込んだものがあるかと、色々な資料に目を通したが、その数は予想より少なかった。（見落としたものもあるかも知れないが）

「関西・参宮・南海線」

52 芦辺のあしの夕風に 散り来る露の玉津島

苦が島には灯台の 光ぞ夜は美しき

「山陽・九州編」

5 舞子の松の木の間より まぢかく見ゆる淡路島

夜は岩屋の灯台も 手に取る如く影あかし

「房総めぐり」

9 砂丘脈うつ大東や 水や空なる大洋の

眺めはここぞ九十九里 灯台白し波荒し

6 犬吠岬の灯台を 仰ぎて銚子松岸や

松尾成東八街を 再び帰る佐倉千葉

「千葉県一周唱歌」

40 台の光は野島崎 岸打つ波も補陀落や

那古観音の霊場も 勝山町も行過ぎぬ

26 猿田越ゆれば銚子町 犬吠崎の灯台は

海原遠く輝けり 港に続く漁業場

## のぼれる灯台参観者数

平成23年度から平成27年度の支所別過去5年間の参観者数及び、平成27年度の支所別参観者数は次のとおりです。（燈光会事務局）

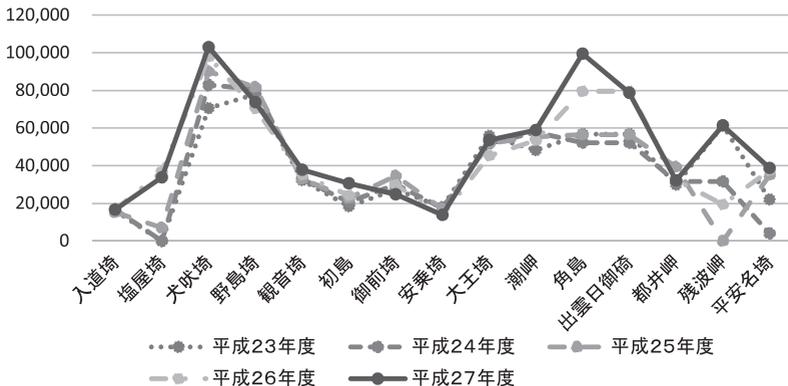
### 支所別・過去5カ年の参観者数推移（平成23年度－平成27年度）

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
入道埼	16,059	16,790	15,233	16,573	16,582
塩屋埼	0	0	7,039	36,923	33,796
犬吠埼	70,518	82,872	90,030	97,823	102,990
野島埼	77,966	80,576	81,808	70,378	73,721
観音埼	32,292	32,816	32,997	35,220	37,901
初島	18,427	20,707	22,675	24,304	30,605
御前埼	27,311	30,011	34,673	29,784	24,746
安乗埼	18,079	17,440	17,049	13,783	13,821
大王埼	55,786	51,804	51,793	45,257	53,694
潮岬	48,224	57,791	55,287	53,457	58,929
角島	56,790	52,182	56,518	79,521	99,426
出雲日御碕	56,790	52,182	56,518	79,521	78,639
都井岬	29,878	31,649	39,355	32,362	32,199
残波岬	61,407	31,588	0	19,355	61,397
平安名埼	22,055	4,017	35,069	37,561	38,851
計	594,755	562,425	596,044	671,822	757,297

#### 特記事項

1. 入道埼灯台は季節参観となっており、平成27年度は平成27年4月18日から11月3日までの約6ヶ月であった。
2. 塩屋埼灯台は、東日本大震災により平成23年3月12日～26年2月22日まで参観を休止した。
3. 平安名埼灯台は、灯塔踊り場亀裂調査等で平成23年12月8日～平成25年3月8日まで参観を休止した。
4. 残波岬灯台は、平成24年度の台風17号による施設被害により、平成24年10月1日～平成26年11月30日まで参観を休止した。
5. 野島埼灯台は、水銀濃度が基準値を超えたため、平成27年2月13日～4月24日まで参観を休止した。
6. 安乗埼灯台は、工事に伴い、平成27年4月2日～5月29日まで参観を休止した。

### 支所別・過去5カ年の参観者推移（平成23年度－平成27年度）



## 第13回

# 灯台フォーラム



灯台フォーラムは、全国から灯台ファンが集まり、灯台を文化的、歴史的、美的観点から見つめ、楽しむ会です。今年、「国境近くに建つ灯台」のお話や、「灯台をうまく撮影するコツ」の伝授など、知的好奇心を刺激するプログラムをたくさん用意しています！懇親会では灯台愛を存分に語り合しましょう。灯台グッズのプレゼントもありますよ！灯台に興味がある方はもちろん、海や船が好きな方、はじめての方もぜひお気軽にご参加ください♪

日時：2016年5月21日 土曜日  
13時50分開始（13時半 受付開始）

会場：波止場会館（日本大通り駅より徒歩3分）  
横浜市中区海岸通1-1  
045-201-3842

会費：5000円  
（灯台グッズ、懇親会の飲食費が含まれます）

参加予約：[toudaiforum@gmail.com](mailto:toudaiforum@gmail.com)  
上記アドレスにお名前とご連絡先を明記し、送信してください。

◆ お問い合わせ ◆  
ライトハウ斯拉バーズ事務局  
0466-28-2857

# のぼれる灯台 introduction

今月号より全国15基の、のぼれる灯台をランダムに紹介させていただきます。

また、参観灯台には、「参観思い出ノート」を置き、参観者の感想・思い出を記していただいておりますので、このご感想を誌面にてお伝えいたします。



今月は…

## ★ 角島灯台 ★

角島灯台は、自然海岸の景観美に勝れた北長門海岸国定公園の中にあって、総御影石造りであり、また、日本に2基しかない無塗装の灯台の一つ。(もう一つは男木島灯台) 低地に築造されることから、当時としては、数少ない高塔形式で建てられ、完成までに約3年を要し、今年で初点から140年目を迎える。本州最西端を初認するために設置され、日本海では初めての大型沿岸灯台であることから、歴史的、文化的にも価値が高く、明治期の灯台では評価「Aランク」、平成21年度には「土木学会選奨土木遺産」にも選ばれています。2代目灯台長のジョセフ・ディックは、島民と親しみ、人材育成に力を注ぎ技術指導を行いました。そして、伝授された島の少年(平石大円)は後年角島灯台長となったことは今でも島で語り継がれているそうです。エメラルドグリーンの海と、白い砂浜、新鮮な海の幸を味わいにぜひ訪れてみてはいかがでしょうか！

### \*\* 概要 \*\*

所在地	山口県下関市豊北町角島			
位置	北緯34度21分09秒 東経130度50分28秒			
灯質(光り方)	単閃白光 毎5秒に1閃光			
光度(光の強さ)	670,000カンデラ			
光達距離	18.5海里(約34キロメートル)			
高さ	地上~灯塔頂部	29.63メートル	平均水面~灯火	44.66メートル
塗色・構造	無塗装、円形、石造 (御影石…花崗岩の石材名)			
レンズ	第一等八面フレネル式閃光レンズ			
設計者	リチャード・ヘンリー・プラントン			
着工	明治6年8月13日			
竣工	明治8年12月30日			
初点灯	明治9年3月1日			
参観開始	平成13年4月28日			
アクセス	自動車：中国自動車道美弥IC~角島大橋~角島灯台公園 電車・バス：特牛駅~角島灯台公園 (ブルーライン交通バス)			

# ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇♪角島灯台の思い出♪◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

燈光会  
マスコットキャラクター  
☆ピカリン☆



## ～感動編～

門司レトロマラソンに参加し、角島まで足をのびしました。沖に浮かぶ白い船、白く砕ける波、海岸線の起伏などここしか、ここだけしか味わえない絶景でした。妻は、昨日走った足の痛さなど全く考えず105段を登って行きます。私は、声は出さず、心でドッコイショ！ドッコイショ！でした。(60代・70代夫婦)

赤ちゃんの時にママにだっこされている写真の場所がここでした。なつかしくて嬉しかったです。(10代女性)

暗く重いイメージだった日本海にも、こんな青色の場所があるんだとおどろきました。家族で来られてよかったです。(30代女性)

家族4人+姪っ子2人で来ました。北九州からここまで来るのは、子どもにとってはたいくつだったかもしれませんが、それ以上のキレイな海と見晴らしの良さ、サイコーでした！200円はムダではなかったです!!またこれたらいいな…嫌なこともふっとびました！(20代女性)

## ～念願かなった編～



神奈川から来ました。＼(^o^)/  
ずーっとなつと来たかったのが本日叶いました♡♡とっっても素敵な景色に感動しました☆☆次は旦那さんと来たいです♡♡ (20代女性)

妻が角島に来たいと言ったので、今日やっときました。天気心配でしたがなんとか晴れて良かった。強風(台風)でしたがそれも思い出となると思う。(60代男性)

念願の角島来てとっっても嬉しいですよ♡灯台も登りました！素敵な景色が見られて大満足――♡また来ます♡次こそは晴れるといいな♡ (20代女性)

大阪府和泉市という所から車で9時間かけて来ました!!キャンプと萩の旅館で山口県を楽しんで帰ります。“角島”はずっと来たかったので来て良かった♡風が強かったけど、自然いっぱいキレイでリフレッシュできました☆☆ありがとう♪(20代女性)

念願の角島灯台に昇りました。レンガを郷里の渡鹿野島(三重県志摩市)の竹内氏が焼いたとの記事(朝日新聞)を見、長年の夢が叶い感無量です。(70代女性)

## ～記念日編～



結婚記念日や誕生日等に訪れる方がとても多いようです！

今日は結婚記念日♡楽しい思い出の1ページになりましたぁ～!!

(50代男女)

結婚1年記念&Birth Day旅行で愛知から来ました。時間がゆっくり流れてとてもリフレッシュできました。景色がとてもキレイです！

(20代女性)

交際100日記念に来ました。広島→山口の旅です。角島灯台最高！また来たいです。晴れて良かった!!

(20代・30代男女)

母の日に、息子夫婦と。いつもありがとうございます。長生きして、また、来ようね。

(40代女性)

80歳、傘寿を記念して来ました。晴天に恵まれすばらしさを満喫しました。84歳を直前にして2人で元気に見学しました。健康が何より宝です。

(80代夫婦)

とてもきれいでした。写真もバシャバシャとりました！お父さんとお母さんの結婚記念日できました。また来たいですっ！

(10代女性)



## ～Study編～

記念館の掲示・展示ビデオもわかり易く良かったです。近代化人力よくわかりました\*模型も比較できました。ありがとうございます。

(50代女性)

東京から来ました。海がとてもきれいで感動しました。灯台は外から見てもよい。登って上から下界をながめてもよい。当時の建築技術の向上にいかにジョセフさん、ブラントンさんが貢献したか教えられた。ありがとうございました。(30代男女)

ブラントンさんと言う、スコットランド人が造られたと初めて知りました。今さらながら感謝です。

(60代男性)

## 船頭重吉の太平洋漂流記

(その八)

京都市在住 佐藤 節夫

## 第三章

## 二、ペゲツの厚情

翌朝、喜三左衛門、角次、佐助の三人がパーウエル号から下りると、浜辺にオロシヤの服を着た日本人らしい三人が立っていた。彼らは互いに走り寄り、言葉を交わす間もなく、しっかりと抱き合った。六人は言葉にならない言葉を発し、涙を流した。少し落ち着いてから、各人が出身地と名前を告げ、カムチャッカに流れてきた経緯を語った。

「わしの船では漂流中に十二人が死んだ」と、喜三左衛門が言った。「わしの船には十四人が乗り組んでいたが十一人が死にこの三人だけが生き残った。かわいそうなことをした」と、重吉は答えた。「それで十二人はどのように始末をつけたのか？」と、重吉が喜三左衛門に尋ねると、「片っ端から海に投げ込んでや

ったさ」という答えが返ってきたので、重吉は同じ日本人でも薩摩の人は気が荒いと思った。「生まれ育つた国は違っても同じ日本人だから異国では親兄弟も同じだ」と、重吉は言って仲間が六人に増えたことを喜んだ。

代官のルダカウは重吉ら三人をホーストン号から下して薩摩の三人と一緒に引き取り、一間を貸し与えて同居させた。それから十日ほど過ぎた頃、ホーストン号から船頭のペゲツと右筆のパネツ、それに召使の黒人一人が下船して旅宿をとった。十月頃、ホーストン号は天文方のエベツと道量のエデメツが仮船頭となつてこの湊を出て行った。重吉は不覚にもその訳を知らなかった。

それからさらに十日ほどして、喜三左衛門が重吉に言った。「我々三人は衣食をオロシヤ国王からもらっているが、お前たち三人はあのペゲツとかいいう船頭に養ってもらっているのだ」。重吉は首を傾げ、「さては

お前たちはオロシヤに何かを献上したのだな」と、喜三左衛門を問い詰めた。「いや、そのようなことはない」。喜三左衛門は答えた。「それならば我々三人も同じ扱いになるはずであろう。もしかしてお前は何か聞き違いをしたのではないか」。重吉は念を押した。「いや、わしは確かにそう聞いた」。喜三左衛門は言い張った。重吉はひどく腹立たしく思った。それと同時に、薩摩の三人だけがオロシヤから恵みを受け、尾張船の三人は除け者にされたというのでは帰国してから不審に思われても言い訳ができないと考えた。

ルダカウから六人の日本人の面倒を見るように命じられているのはオンデレイハンという男であった。重吉はこの男が薩摩の者から賄賂を受け取り、自分たち三人に不当な扱いをしているのではないかと疑った。それが事実なら絶対に許せないと重吉は思った。このことを暴露しても自分たちを薩摩の者と同等に処遇しないのであれば目に物見せてやろう。重吉はそう思い詰めて懷中に剃刀（かみそり）を忍ばせた。重吉がオンデレイハンの家を訪ねると、家人が彼は役所に行っていて留守だと言った。「今すぐ呼びにやれ」。重吉は厳しい口調で命じた。召使は役所へ走り、オンデレイハンに「大将が来た」と告げた。日本では上に立つ人

のことを「大将」と呼ぶと心得ているらしく、重吉は船頭だからオロシヤ人は重吉を「大将、大将」と呼んでいた。

しばらくしてオンデレイハンが帰宅した。「何か用か？ 不自由しているものがあるのか？ 砂糖が無いのか？」。彼はたいそう親切な口調で重吉に尋ねた。しかし、重吉は険しい顔付きを緩めず、声を荒げて言った。「お前はいつたい薩摩の者から何をもらったのだ」。人の良いオンデレイハンは小首を傾げ、「何も貰った覚えはない」と答えた。「それならばどうして薩摩の者だけを大事にして我々三人をないがしろにするのか」。重吉は彼を問い詰めた。すると、オンデレイハンにもようやく重吉が怒っている理由がわかったらしく、首を大きく下に二度三度動かした。「それには訳があるのだ」と彼は言い、次のように話した。

都からの仰せによれば、オロシヤの領分へいかなる国の人が漂流して来ようとも大切に保護をしてその国へ送り返してやらなければならぬ。薩摩の三人はハラマコタン島へ流れ着いたので、オロシヤアが大切に世話をして日本へ送り返さなければならぬ。しかし、重吉ら三人は海上で漂っているところをイギリス船に助けられ、カムチャッカへ来たのだから、日本へ送り

返すには代官のルダカウが都のベトロツ（ペテルブルグ）へ伺いを立てて許しを得た上でなければならぬ。ここからベトロツまでは早飛脚でも九カ月を要するので、少なくとも往復十八カ月を経なければ都の指図を受け取ることができない。

ペゲツはそれを知って悩んだ。来年の夏になって海の氷が解ければ薩摩の三人は日本へ帰ることができるけれど、重吉ら三人はまだここに留まらなければならぬ。それを知って重吉らはどれほど嘆き悲しむことだろうか。また、住み慣れない極寒の地で長逗留すれば二人の病人はどうなるかも知れない。あまりにかわいそうだから、ペゲツは「都へは内々にして是非六人を一緒に帰国させてやってくれ」とルダカウに頼んだ。ルダカウは「それでは来年の夏までの重吉ら三人の賄いはお前が手当をしてやるか」とペゲツに聞いた。ペゲツは「そうしてやろう」と同意した。「それでも薩摩の者はここから乗船させて日本へ引き渡すことができるが、重吉ら三人はお前が自分の手で引き渡さなければならぬが、それでもよいのか」と、ルダカウは重ねてペゲツに言った。「わかっている」。ペゲツはそれも承知した。しかし、ホーストン号を長々とこの地に留めておいて交易を遅らせる訳にはいかないのので、

ペゲツ、バネツ、召使の三人は下船し、ホーストン号を仮船頭で広東方面へ行かせたのであった。

重吉はオンデレイハンからこのような説明を聞いて涙をこぼさんばかりに感動した。ペゲツはこれほど大きな犠牲を払ってまでも自分たちのために尽くしてくれるのだ。そんなことにも気づかず、懷中に剃刀を忍ばせてきた自分はなんとという大馬鹿なのだ。重吉はうなだれてオンデレイハンの家を辞した。

重吉はこの後もペゲツの厚情を思い返すごとに申し訳ない気持ちで胸が一杯になった。そのことをこの地のオロシヤ人に話すと、「オロシヤでは他人を助けることを第一としているので、ペゲツにどれほど出費があっても彼からお上に申し上げれば、たとえ十金の出費があればお上から二十金が下されるので心配はいらない」と言われた。はたして本当にそうだったかどうか、重吉はついに知ることはなかった。

（以下次号）

# 私の31文字の世界

普通会員 堀田克治

私の31文字の世界なんて、仰仰しく書き始めましたが、私の短歌の世界の中に、人様に声高く申し上げる程の価値あるものは御座居ません。けれど、年のせいで御座居ましようか、私なりの短歌観を書き残してみたいと思ひ立つたので御座居ます。

この貴重な燈光誌のページを頂くことをお許し下さい。

私の短歌の世界、それは今までは私の心を時には励まし、時には慰めてくれる私の心のいのちなのです。また、感動も味あわしてくれているのです。

それでは、31文字の短歌の世界から何を学んだかと申しますと、継続は力なり、塵も積もれば山となる、と言った極めて単純な2つの教訓的な世界なのです。

コツコツと短歌を趣味としている体験から、継続は力なり、塵も積もれば山となる、という貴重な2つの世界を学んだのでした。

いまから丁度10年前になりますかしら、或る友にすすめられて、私は燈光誌の歌壇に短歌を投稿する機縁に恵まれたのでした。その、短歌の投稿は毎月5首、コツコツと稚拙な歌を投稿して参りました。毎月5首であっても、継続するということは、思ひもかけぬ成果を生むものです。

1か月5首、1年で60首、10年で何と600首にもなっていたのです。単純に1首1字として、600首で18600字余りになっていたのです。18600字と申しますと、4000字詰原稿用紙で言えば、46枚余りとなります。

原稿用紙46枚分の文章量と言えば、おいそれと簡単に書けるものではありません。たとえ、1首31文字であっても、コツコツと継続していると、10年の歳月の間に、4000字詰原稿用紙、46枚分の字数を書き上げていたことになっていたのでした。

この成果に我ながら凄いと深く感動を覚えたのでした。コツコツとした小さなことでも、継続していると、その大きな成果に感銘の心をときめかせてくれるものです。

いつであったか、朝日新聞の天声人語に、奇抜な歌が載っていた。余りに奇抜に思えたので紹介しておこ

う。なんでもこの、歌は、短歌の部門で優秀歌として賞を得た歌であると解説されていた。

その31文字は「623、8689、815、53にすぎ、我は生きている」このような31文字であった。

さて、少し奇妙な歌であるが、この歌について、こんな解説がされてあった。

623は、あの、昭和20年6月23日、第二次世界大戦で、沖繩戦が終わった日である。また、8689は昭和20年8月6日は広島に原爆が投下された日、同じく8月9日には長崎に原爆が投下された日である。また、815は8月15日敗戦として、残念ながら日本の降伏という形で戦争は終結した。そして明けて昭和21年5月3日、日本は新憲法のもと、民主主義国家として再出発したのです。そして今、日本は冠たる民主国家として、世界に生きているのである。

この奇抜な着想というか、奇抜な発想によって、戦後70年の史実を印象的に歌い上げているのである。

この歌をしみじみ味わっていると、31文字の世界には着想力、発想力を養ってくれる心的エネルギーがあるであろう。

着想力、発想力を養ってくれる短歌の世界、31文字の世界は何と素晴らしい心の世界なのだろう。この世

の人生を生きる時、私達は着想力、発想力のエネルギーで、この世の楽しみや、幸福の世界を見出すものがある。

着想力、発想力を養ってくれる短歌の世界、いつまでも愛しながら、人生を生きて行こうと夢みています。

# 燈光俳壇



## 坂 正直 選

近くまで来てるよとメール春隣り

東京 山本 五風

評 訪日する中国人の爆買いがニュースとなっている

評 待ち合わせの約束があつてのメールでしょう。会話

調の「近くまで来てるよ」がなかなか効いている。

待ち遠しかった春がすぐそこまで来ているという意

味の季語「春隣り」の選択もいいである。

ほつほつと光集めて二月尽

南さつま 坂本 さだを

忍び込む夜の学校浮かれ猫

図書館の机に節や日脚伸ぶ

評 「浮かれ猫」は発情期に入った雄猫のことで春の季

語。雌猫は雌猫を求めて彷徨ったり争ったりするも

のであるが、なんと夜の学校に忍び込むとうとしている

らという。その異常さを取り上げているのが面白い。

評 作者はよく図書館に通われ、同じ机に座す習慣にし

ているものと思われる。窓からの日差しがその机に

節に届いているのを発見して「日脚伸ぶ」を実感し

たのである。この季語にふさわしい句材である。

レーキ掻く球場の土春兆す

物干しのシャツ擦りぬ春の風

評 冬の間は雪を積んだり、凍ったりしたグラウンドに

いよいよ野球シーズンが来たのである。う。「レーキ

掻く」がそのスタートに当たつての準備作業である。

球場の「土」に注目した体育系作者の眼に感心した。

評 「擦る」はくすぐると読む。物干しのシャツの躍り

上がる様子がよく伝わって来て楽しい。くすぐって

いるから「春の風」が生きたのである。

廃校となりし校舎に花吹雪

春一番爆買いツアー御一行

評 「廃校」は、深刻な問題となっている地方過疎化の

象徴的な現象である。政府も新たな政策を打ち出すこととしているが、「花吹雪」が大演歌のようである。

馬鈴薯や発芽が畑へ駆り立てる  
評 私も花壇と少しばかりの菜園をやっているのですが、作者の「畑へ駆り立てる」の気持ちがよくわかる。そういうった自然への心遣いを大切にしていきたいと思っ  
っている。

庭に來し小鳥も春の恋に消ゆ

名古屋 豊 蔵 十四三

名城や立春にして濠凍る

評 「名城」は名古屋城である。この地方の立春は予想以上に寒かったようで、この句は城のお濠が凍ったことに驚いているのである。「立春にして」がそれをよく伝えている。

槌音を止めて震災忌の祈り

評 東日本大震災から五年が経過したが、その復興は遅々としている感があり、防災機関にあったものとして心が痛む。多くの人が「槌音を止めて」祈っている復旧作業の現場を想像した。

梅の香の夙に芳し知多の里

評 知多地方の梅の里を尋ねたものと思われる。素晴ら

しい梅園に出会った興奮が「夙に芳し」の表現になつた。

啓蟄や窓開けて風入れ替へる

評 「啓蟄」は陽暦の三月六日ごろ。暖かくなつて冬眠していた地虫や蛇などが穴から出て来ることもさす。その日を迎えて作者が晴れ晴れとした気分になつているのだ。

春光満ちて岬に燈台に

## 近 詠

坂 正 直

窓に競ふ花の太枝博物館  
拳で板割つて歓声花むしろ  
花片々繋がれ眠る釣小舟

兼題

青嵐・花菖蒲・その他当季

# 燈光歌壇



## 桜沢 っや子 選

横浜 宮田 昭

葉山 長島 博子

○勤務履歴回顧しながら灯台の螺旋階段涙で降りる  
○リズムよく灯台のレンズ廻りおり有限の灯寂の彼方へ

○狐憑きの若き女のいる灯台は立ち去るわれにこぬか  
雨降らす

○防人が篝火燃やし明けとせし思いうけつぐ灯台守われは

評 かつて作者が勤務した灯台への思いが熱く詠まれて

いる（さらば灯台編）である。螺旋階段を黙々と降りていく姿が目に見えてくる。上句の実感が涙で降りるの結句をひき立て懐旧の思いを深める一首目。

狐憑きの若い女のいる灯台は物語めいて、行ってみたくなるようで楽しい一首。かがりやとか灯明台と呼ばれた以前に防守りの燃した篝火が灯台となりそのころを受けついできた作者の灯台守り人生の深い誇りがあらわれている四首目。

○あれこれの教えを聞きて迷う筆自信くづれて白紙見つめる  
○墨の香と熱気あふれる合宿の熱海の宿に夜明け雨降る

○大寒の上野の森の月明り書展会場の会話やさしき

○お雛さま養護ホームにいろいろの思い吸いこむように並べり

評 多くの先生方から色々と教わり指摘されて納得をし

た。いざ書作に向かうとそれらの教えが浮かんできて筆先が迷って進まない。結句の白紙見つめるは実感の一首目。合宿先の熱気を冷ますような夜明けの雨がやさしい二首目。養護ホームに飾られたお雛様。眺めるホームの人たち。様々な人生を生きて来られた人たちの思いを吸いこむように並んでいる。余白が重たい四首目。

○燈光誌届けば開く短歌欄選者の批評に励まされたり  
○メ切りに慌てぬぞよと自己暗示かければ四首ででき  
がりたり

○寒さの少しゆるみし公園に遊ぶ園児らの声の弾めり  
○駅への道急げば路面力チカチと音をたてつつ余寒を  
告げる

評 届いてまず開く燈光歌壇、出詠者は先づ歌壇を見る。  
批評を読んで納得して意識をかきたててほしい。「余  
寒」はよかんと読み立春後の寒気で本来寒さの厳し  
い時期を過ぎてなお感じられる寒さ。春寒、とも言  
う。寒さのゆるんだ公園に遊ぶ園児たちの声は春の  
先駆けのようで明るい雰囲気伝わる。

○ブロッコリー鶏の胸肉鯖缶の食生活に馴れて満ち足  
る 東京 しらたきよう子

○筋肉の痛みの波を乗り越えてジムでの効果徐々にあ  
らわる

○書き通す十五時間の筆の先こめたる思い紙背にとど  
け

○眠りより覚めたる墨の精霊か誌面に跳ねて滲み擦れ

る

評 脂肪燃焼効率のよい食事に切り替えて満足している  
様子が表れている一、二首目。十五時間ぶつ通しの  
書作とはきくだけでハードであろう。さればこそこ  
めたる思い紙背に届けなのだ。「眼光紙背に徹す」  
の言葉通り筆先にこめた思いは深い。何年も経てき  
た墨は生きているのだ。四首目を読んでどきりとし  
た。墨の精霊が現れて書体となって跳ねて滲んでか  
すれるという古典の奥の深さであろう。

○大型の運転免許証返納すダンブカーには縁なきまま  
に 北九州 土谷 文夫

○免許証返納したる日渋滞を横目に歩く春の日浴びて  
隣でスマホ 「誰でもいい人を殺してみたいなあ」つぶやく若者

○東京のお天気テレビは騒ぎいる地方に住めばちらり  
視るのみ

評 失業したらダンブの運転手になるかと取った大型免  
許証、失業することもなく定年を迎えることになり  
返納しようという大型免許証。清々しく生きた人の  
思いが溢れる。安らぎと寂しさが緋い交ぜになっ

た。さばさばした気持ちですとのコメントが清々しい作品。座席でスマホを使っている若者を見る。恐ろしい事件もあったのでこの様な作品も生まれる。四首目は作者の醒めた目でみた一首。大雨だ雪だと東京のテレビは騒ぎすぎるのではという。

## 近 詠

桜 沢 つや子

○沖遙か船を浮かべる鹿島灘際立つ昼の灯台清し  
○早春の海おだやかな大洗艦砲射撃語る人なし  
○立春の風まだ寒き川沿ひに猫柳の芽律気に芽ぐ  
む